
追憶の幻影～コナン&キッド～

広洲海人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

追憶の幻影〜コナン&キッド〜

【Nコード】

N5563N

【作者名】

広洲海人

【あらすじ】

恐怖の連続殺人。現場に残されるのは一輪の白い花。月下の奇術師さえも狙う犯人の正体は？ 目的は？

快斗が被害者！？ コナンとの遭遇・・・コナンは快斗のもう一つの顔を見破れるのか？ 快斗は隠し通せるのか？

真実が闇に浮かびあがる時、人の弱さと嘆きが暴かれる。

大切な人を奪われた時、あなたはどうしますか？

自己紹介

はじめまして！

広洲海人です。

未熟者ですがこれからよろしく願います。

目標は「始めた連載は最後まで書ききること」です。

更新はかなりののろのろと不定期に進みます。が、必ず完結させるのでご安心ください。

駄文・乱文もあるかと思いますが、温かく見守ってやってください。

主にコナンの世界観に基づく二次創作をやろうと思っています。

私はアニメファンなので、コミックファンの方には物足りない描写も多いかと思います。ご容赦ください。

トリックとか頑張って考えてはいますが、まだ穴だらけです。難しい（泣）。

古今東西の推理作家の素晴らしさを実感する今日この頃です。

コナンとキッドの絡みが好きです。その辺を書くことも多いと思います。

まじ快ファンの皆様、すみません。変なキッド（快斗）になっているかも・・・（汗）

とにかく頑張ります！

それでは、そろそろ始めたいと思います。

お楽しみ頂ければ幸いです。

e L A
p h e t' r e
h a s y
n t s o
a t a u
s a r
m r e
o t a
f m d
y y?
m f
e i
m r
o s
r t
i e
e n
s" o
v
e
l,
"
T
h

探偵団は事件を呼ぶ

P M 4・・00 米花町

ある水曜日の夕方。5人の少年少女たちは家路を急いでいた。賑やかな笑い声が響く。

「今日もコナン君すごかったよ」

おかつぱ頭にカチューシャをつけた女の子がにこにこして言えば、

「あーあ、サッカーするといっつもコナンの一人勝ちだよなあ。」

小学生とは思えない体型の男の子がぼやき、

「仕方ありませんよ、元太君。僕たちももっと練習しないと。」

そばかすだらけの男の子が先程の少年をなだめる。

(ガキの相手も疲れるんだよ・・・)

一番小柄なメガネの少年。見た目はどう見ても小学生だが、中身は高校生。子供の無邪気なハイテンションについていけない様子である。

それを見ていた茶髪の少女がポツリ。

「さっきまであんなにはしゃいでいたじゃない・・・。」

ほんの10分前まで、目をキラキラさせて真剣にボールを追いかけて

ていた彼は、他の誰よりも楽しんでいるように見えた。いや、確実に楽しんでいた。

「なんか言ったか？」

少年が彼女の独り言を聞き咎めて振り向いた。

「別に。何でもないわよ。」

「そ、そうか・・・」

少女は笑い出したいのをこらえ、努めて冷静に答える。

そんなこんなでいつもの曲がり角に来た。冷たい北風が容赦なく子供たちに吹き付ける。

子供は風の子。但し、それは夢中になって遊んでいる時の話。寒いものは寒いのである。

「ひいい、さみい。」

「元太君が寒いんじゃ、今日は本当に寒いんですね」

かなり太めの少年に対し、そばかすの少年が何気に失礼な発言をします。

風で飛ばされてきたのか、ポスターやら空き缶があちこちに転がっている。

「じゃーねーコナン君！また明日！」

カチューシャの少女がメガネの少年に元気よく手を振った。

「おう、お前らも気をつけてかえ・・・」

少年が言いかけた時、

ガシャン！

きやあああ！

ガラスの割れる音と、ただならぬ悲鳴を聞いた5人はとっさに音のした方へ走っていた。

“サッカー帰りの小学生”から“少年探偵団”の顔になって。

はじまりの事件

たどり着いたのは、角を一つ曲がった所にある洒落たバーだった。通りにガラス片、というより通りに面していたガラス窓そのものがそっくり外れて散乱している。

入り口で、真っ青になった女性が一人腰を抜かしていた。

視線の先には血まみれの店内と倒れている男性。側には粉々になったカップ。現場特有の張りつめた圧迫感。子供たち3人の顔は顔を青くしていたが、2人はある意味で冷静だった。

「灰原！警察と救急車だ！」

そう言いながらも、コナンは既に手遅れであることを悟っていた。

これが廻る悲劇と真実のはじまりだなんて、どんな名探偵も予想できなかっただろう。

「被害者は檜野直樹さん、43歳。このバー、“マジックアワー”の店長です。死亡推定時刻は正午頃。死因は頸動脈を切られたことによる失血死とみられます。」

到着したのは目暮警部と高木刑事。高木が被害者の身元と状況を読み上げていく。

「それで、第一発見者の女性は？」

「それが、相当ショックを受けていて、まだ話を聞ける状態では・・

・」

「僕たちで良ければ答えるよ？」

殺人現場に似合わない、しかしこのシチュエーションでは聞きなれた子供の高い声。嫌な確信を持って振り返れば、あの5人。

「また君たちかね・・・。」

（この子たちもあの男に負けず劣らず・・・）

（疫病神か救世主か・・・）

互いの思いがシンクロする目暮と高木。これほど事件現場に遭遇してしまう小学生たちは他にいないだろう。

「どうしてここに？」

「僕たち、学校でサッカーをして帰る途中だったんだ。そうしたら、ガラスの割れる音と悲鳴が聞こえたから来てみたんだよ。怪しい人とかは見なかったけど・・・お前ら、誰か見たか？」

首を振る4人。着いたときには、犯人は既に逃走した後だったのだ。

急に周りが騒がしくなった。

「一体何があったんですか？」

「殺人ってどういうことですか！」

口ぐちに叫びながらやってきたのは、4人の男女。

「あなた方は？」

目暮の問いに一番年長らしい男が答える。

「この店の従業員です。」

迷探偵登場

しばらくして、5人の話を聞くことになった。

第一発見者は楠本茉莉（26）。この店の従業員の一人で、3年前からここに勤めている。

「私は・・・いつものように出勤してきました。店の中に、店長と誰かもう一人いて・・・。早めのお客様がいらしているのかと思い、中に入ったら突然襲われて・・・。」

途切れ途切れに話す彼女の声は弱弱しく、怯えているようだった。

「犯人の顔は？」

「・・・見ていません。黒っぽい服装で、サングラスと帽子をつけていたと思いますが・・・。」

整理すると、店長を殺害した犯人らしき人間が店内にいた。そうとは知らずに店内に入った楠本は犯人に襲われる。幸い怪我はしなかったが、ガラスはその際に割れたという。そして、樫野の遺体を見て悲鳴を上げた、ということだ。

「では、念のため、あなた方のお話もお聞かせ願えますかな。」

「えっ・・・私たちも容疑者ですか？」

茶髪の女性が驚いたように言う。

目暮がいつものように、「手続ですから。」と説明している。

従業員は全部で5人。第一発見者の楠本茉莉（26）、店を開いた当初からチーフを勤めている木元祐輔（41）、5年前から働いている柳百花（26）、2年前から勤め始めた笹山浩史（32）。

話を聞こうとしたまさにその時・・・

「け、警部殿!？」

その声は・・・

「おゝ毛利君!」

事件あるところにこの男あり。ある時は迷推理で捜査を惑わせ、ある時は眠ったまま名推理を披露して難事件を解決に導く、訳のわからない男。

様子から察するに、この店の常連らしい。

「事件ですか・・・? って、なんでお前らまでいるんだよ!」

コナンたちに気づいた小五郎がビクツとする。明らかにおかしい。

「僕たちも目撃者だよ。」

(おっちゃん・・・なんか隠してねーか?)

小五郎の隠していることなど、たかが知れている。

「おじさーん、もしかして、最近ここにこっそり通ってたんじゃない?」

「お前、どうしてそれを・・・あ。」

慌てて口を押さえるが、時すでに遅し。

「この頃やたらと浮気調査が多かったしね。蘭ねーちゃんには『飲み過ぎよ!』ってお酒は没収されてたし。」

思いつきり半目になって小五郎を見つめる小学生と、その視線にたじたとっている(表向きは)今をときめく名探偵。何とも奇妙な図である。

「うっ・・・コ、コナン君、蘭には黙っていてくれませんか・・・?」

娘の、特に怒った時の凄まじさを今さら思い出したのか、気持ち悪いくらい丁寧に哀願する小五郎。

(ハハハ・・・毎回毎回、懲りねー親父だな。)

帰ったら湿布の用意しといてやるか、とため息をつくコナンだった。

「いつも思うんですけど、本当にあの“眠りの小五郎”なんですかね……？」

「偽物なんじゃねーの。」

「えーうつそー。」

小学生にここまで言われてしまう小五郎って一体なんなのだろうか。灰原にいたっては『呆れてものが言えません』といった表情をしている。

「うおっほん。」

目暮の咳払いで、我に返った小五郎なのであった。

捜査開始

小五郎も加わって、捜査が再開された。場所は店の奥にある休憩スペースだ。

ロッカーやそれぞれのインシヤルが入ったカップが置いてあり、アットホーム雰囲気が漂っている。

テーブルの上にはN・Kのインシヤルの入った高級感溢れるが、趣味のいいライターと煙草。

どうやら店長のものらしい。

全員が席に着いたところで、目暮が聴取を始めた。

「何か榎本さんに恨みを持った人物に心当たりはありますか？」

定番の質問に古株の木元が答える。典型的な中年太りだが、嫌な感じは全くない。丸いメガネが温和な雰囲気を一層引き立てていた。

「うーん、仕事のできる良い店長でしたからね……。まあ、仕事ができる一方で、自分にも他人にも厳しくて。接客やマジックが粗末だと容赦なく首にしていたから、以前入社を申し込んで、断られた人の中には彼を恨んでいる人もいるかもしれません。」

「マジック？」

高木が聞き返す。

話によれば、榎野は本格的にマジシャンを目指した時期もあって、大のマジック好きだという。

それで、このバーでは従業員が客にマジックを見せて楽しませる余興を行っているらしい。

基本的に従業員は榎野の知り合いでレベルの差はあれ、みんなそれなりのマジックができる。

「それじゃあ、面接に来た人の中で、特に印象に残っているような人はいますか？言い争ったとか……。」

今度は小五郎だ。

「そうだなあ……ああ！もう10年も前になりますが、面接に来た男……。」

「何かあったんですか？」

「いや、事件とは関係ないかもしれませんが。彼はマジシャンとしてなかなかいい腕を持っていたんですよ。真面目そうな男でしたし。樫野さんと顔見知りのようでしたが、あまり関係が良さそうには見えませんでした。樫野さんは『君には大切なものが欠けている。それが分からないなら、君を雇うことはできない。』と言って追い返してしまつて。そのあと、彼は亡くなった……いや、殺されたんです。」

だから、10年も前のことを覚えているんですよ、と遠慮がちにつけ足す。

警部や小五郎の驚きと疑問の声を受けて、彼はゆっくりと言葉を選びつつ説明していった。

「僕も新聞やニュースで見ただけですが、どうやら彼は違法賭博事件にかかわっていたらしいんです。」

さらに、強盗にも手を出して……最後は犯人グループと仲間割れしてか殺されたと。」

木元の声はだんだん小さくなっていった。ほとんど知らないにしても、顔見知りの人間が事件に巻き込まれて殺されるというのは気味の悪いものだ。

「この事件とは関係ねーか。」

小五郎は少しがっかりしたように呟いた。

（10年前に来た男はもう死んでいるし、それよりも疑うべきは従業員だ。・・・ん？）

部屋の中を歩き回りながら考えていたコナンはふと顔を上げた。

目の前にはきちんと鍵のついたロッカーが5つ。

「ねえ、おじさん、このお店の店員さんって本当に全部で4人？」
大人たちの視線が一斉にコナンに集まる。

「だって、ちゃんと鍵がついたロッカーが5つあるよ？ 檜野さんは奥の部屋に住んでいたんでしょ？ だったら、ロッカーを使う必要がある人が檜野さんのほかに5人いたってことだね？」

「大人しくしてろっていったろ・・・！」

小五郎の手を上手くすり抜けながら続ける。

「それに、ここは休憩スペースなんでしょ？ その戸棚にはイニシヤルつきのカップが6つ。」

N・K、M・K、Y・K、M・Y、H・SにK・K。ここにいないのは・・・K・Kさんだね！」

相変わらず細かい所に目をつけるコナンに感心する目暮と高木。

「そういや祐さん。あの若いにーちゃんは？」

小五郎が本元に尋ねる。そこはさすがに元刑事。なんだかんだ言うて見る所は見ているらしい。

「彼は土日のアルバイトですよ、毛利さん。」

「あの、彼のことを教えていただけませんか？」

置いて行かれそうになった目暮は慌てて尋ねた。

途端に、4人の間に誰しも経験あるだろう空気が流れる。

答えなくてはならないが、聞かれたくないことを聞かれたときの空気だ。

「刑事さん・・・この際、細かいことはあまり気にせず聞いていた
だきたいのですが・・・」

5人目の従業員

「刑事さん……この際、細かいことはあまり気にせず聞いていただきたいのですが……」

かなり言いにくそうに木元が口を開く。他の3人もお互いに目配せしている。

（いったい何なんだ？この空気……。）

コナンが不審に思っていると、木元が仕方ない、といった感じで大きく息をついて話し始めた。

「彼の名前は黒羽快斗。江古田高校2年生、17歳です。」

「「じゅ、じゅうなな〜!？」」

（おいおい、そりゃまずいだろ〜）

目暮と小五郎が叫び、コナンは心の中で突っ込みを入れた。

「木元さん!あなた、酒を出す店が高校生を雇っていいと思ってるんですか!」

「祐さん!俺もそれは聞いてねーよ!」

目暮がけしからんとばかりに木元を責め、小五郎が驚く。

「分かっていますよ!もちろん彼の仕事は主にショーと掃除です。」

「樫野さんが黒羽君を雇ったのは彼のマジックの腕を見込んだから

なんです。」

「お酒を扱う仕事はさせないように気を配っています！」

「彼のマジックは一度見たら忘れられないくらい素晴らしいんですから！」

木元が続いて笹山、楠本、柳が次々とフォローを入れる。その迫力にたじたじとなる目暮と小五郎。

（最近の世の中にはついていけない・・・。）

二人の心の声である。

黒羽快斗は皆からとても好かれているようだった。

「・・・えー、それではその青年からは後日話を聞くとして、皆さんの今日の行動をお聞かせ願えますか？」

アリバイ証言

何とか警部の威厳を取り戻した目暮が捜査を再開する。

まずは木元から。長年勤めていることもあって、檜野とはプライベートでも仲がいい。

「私は、檜野さんから頼まれていた洋酒を買いにいくため、10時頃杯戸町2丁目の自宅を出ました。11時30分頃に酒を買って、一度家に戻りました。あとは自宅にいて・・・ああ、昼頃に学生時代の友人から次の休みに久しぶりに飲みに行かないかという誘いの電話がありました。自宅を出たのは30分くらい前です。」

彼が持っていた領収書には、確かに今日の日付と11..27が記されていた。

彼の携帯には着信履歴があり、相手にも確認は取れた。

次に証言したのは笹山。体は引き締まっており、スーツにきちんとネクタイまでしめている真面目そうな男だった。木元とは違い、完璧すぎる印象のせいでもことなく近寄りがたい。

「私は、今夜の仕事のために自宅ですつと準備をしていました。12時に楠本さんと昼食がてら駅前の喫茶店で30分くらい打ち合わせをしました。その後は、2時から店に酒を入れている業者と話し合いを。」

酒を卸しているのは“株式会社 サセックス”という会社。確認を

取ると、確かに話し合いは行われており、3時半頃に笹山を見送ったらしい。

ふと笹山の手を見たコナンは不思議に思い、疑問を口にした。

「あれれ？おじさん、その人差し指のタコどうしたの？」

彼の指はタコができ、皮がめくれていた。どう見ても日常生活できるものではない。

「ああ、これかい？実はね、クレール射撃っていう競技をしているんだよ。君は知らないかな？」

「知ってるよ！飛んでくる円盤を撃ち落とすやつだよ！おじさんすごいね」

他のメンバーの話によれば、彼は射撃の全国大会にも出場する腕前だという。それでもこの仕事が好きだから、と言ってこの店で働いているのだ。

子供の演技全開で話を聞き出していたコナンだが背後の冷たい視線を感じて振り返った。

（こいつらのこと忘れてた・・・。）

半目で呆れたように彼を見ているのは少年探偵団の面々。

「前もこんなことありましたけど・・・やっぱりやめた方がいいですよ。」

「かわいいコナン君も嫌いじゃないけど・・・。」

「お前、俺らに対してだけ年誤魔化してんのか？」

灰原の視線は違う意味で冷たい、というより痛い。

（ハハハ・・・またやっちゃった・・・。）

コナンになってから良く使う手であるが、探偵団の前では使えない。自分の学習能力の無さを呪う探偵だった。

次は笹山と会っていた第一発見者の楠本。ボブカットヘアで小柄、大人しい印象を受ける。

「私も、仕事の準備をしていました。笹山さんと打ち合わせをして、その後は駅前の書店へ。あ、1時頃に笹山さんから電話があって、商談に必要な数字をいくつか伝えました。必要な本が見つからなかったので5軒くらい本屋を回ったり電話したりした後で、米花ショッピングモールへ市場調査に行きました。それから店に行って・・・あとはさっきお話した通りです。」

彼らが示した喫茶店の伝票は確かに、

“ 2名様

コーヒーセット2

12..13注文受”

となっていた。

彼女が探していたのは20年ほど前に出版された酒に関する洋書。

国内では手に入りにくく、珍しい本のため注文を

受けた店員はそのことを覚えていた。時間は2時頃だと言う。

最後は柳百花。自宅は徒歩で3分、この中では一番近い。ダークブラウンの髪をアップにまとめ、はきはきと物を言う。活発な印象の明るい女性だ。

「私は、昨日やり残した仕事があって、ほとんど徹夜でしたから昼頃に起きました。宅配便の配送車が来て、玄関のチャイムを鳴らした音で目が覚めたんです。それから色々と片づけたりしていて、家を出たのは4時頃です。」

宅配便の中身は実家から送られてきた野菜だという。配送センターにも事実は確認できた。

結局、全員何かしらのアリバイを持っている。

ふーむ、と考え込んだ小五郎が煙草を取り出して火をつける。が、ライターが切れていた。

「あの、どなたかライターをお持ちですか？」

「私たちは誰も吸いませんから・・・店長のもので良ければ。」

さすがに被害者の持ち物を使うのはまずい。小五郎は諦めて煙草をしまった。

コナンは犯行時刻にも引っかかっていた。犯人がガラスを割って逃走したのはついさっき、午後4時頃のことだ。4時間もの間、犯人は一体何をしていたのだろうか。

現場検証

（室内は荒れているし、何かを探していたのか？）

捜査開始だ。現場の状況はこの人に聞くに限る。

「ねえ、トメさん。何かおかしなところなかった？」

「おー小林少年。変わったところも何も、変なことだらけだ。」

トメさんは店の奥にあるテーブル席を調べていた。その上に乗っているハンドバッグと紙袋はおそらく楠本のものだろう。振り返ってコナンの姿を認めると、彼は親切に状況を教えてくれた。

「店内がこれだけ荒れてるってのに、金目のものは何一つ盗られちゃいない。店の売り上げは全額無事だった。そのうえ、被害者が抵抗した跡がないんだ。」

抵抗した跡がない。つまり、油断していた所を不意に襲われたのだ。顔見知りの犯行と見て良いだろう。

さらに、現場には凶器とみられる刃渡り20cmくらいのナイフ。どうやら奥の厨房から持ち出されたものらしい。そばにはLサイズの黒いフード付きパーカーが落ちていた。返り血で赤黒く汚れている。

（どうして残していったんだ・・・？・・・これは？）

コナンの目に留まったのはパーカーの袖口に張り付いた小さなビニール片だった。

聞くと、指紋や毛髪は全く出てこなかったという。

「あとは、この白い花と被害者が持っていたその絵かな。」

絵はどこにでもあるような絵手紙風の小さなもの。

夜の夜景に浮かぶ高層ビル群のひとつが描かれている。

ビニール袋に入った白い花を見せてくれる。特に珍しい様子はなかった。

「ジャスミンね・・・。」

ジャスミン。漢方薬やお茶、最近ではハーブとして好んで用いられる花である。

いつのまにか隣に来ていた灰原が呟いた。

事件の鍵を握るのは、この花なのだろうか。

「あー、あとこいつはかなり重要かもな。」

トメさんが片手にぶら下げていたのは小さな革のストラップ。こげ茶色の革にk、kとイニシャルがあり、砂粒のような水晶がついている。

コナンは目を見開いた。K、Kと言えば、先程まで話していた高校生ではないか。

しかもこれが落ちていたのは血だまりの上。しかし血は付着していない。犯行後に落とされたものとか考えられなかった。

目暮がストラップを引き取って、黒羽快斗に確認を取ることになった。

「このお店って、絵がいっぱいあるんだね。」

歩美の声につられて店の方を見れば、確かに被害者が持っていたのと同じようなサイズの絵がたくさんある。

ガラスが割れた時に吹き込んだ強風で傾いたりひっくり返ったりしているが、山々や海、田園風景などが描かれているのが見て取れた。被写体は様々だが、どこか懐かしい風景である。

「ねえ、お姉さん。」

「なあに？」

子供らしく柳に話しかけてみる。しゃがんでコナンと同じ目線になるようにする柳。

絵のことを聞くと丁寧に答えてくれる。

「あれはね、オーナーの趣味なの。お国自慢ってところしら。」

話によれば、ちょっとした企画で各々の故郷を描こうと言うことになり、一人一枚絵を描いて店に飾ったという。道理でタッチが素人っぽかったわけだ。裏には店長にだけ分かるように暗号で作者の名前が入っているらしい。

（手品に暗号の趣味・・・どっかのコソ泥みてーだな。）

不謹慎な考えは胸の内にしまい、笑顔でお礼を言う。ついでに気になっていたことを聞いてみた。

「へえ、教えてくれてありがとう！・・・そういえば、お姉さんどこかで会ったことない？」

特に特徴があるという訳ではないが、彼女にはどこか見覚えがあった。

「え？あ、君は確か毛利さんの所にいるんだよね？私、探偵事務所

の裏のアパートに住んでるの。だから、何処かですれ違ってるかもね。」

そう言って不思議そうにコナンを眺めている柳から離れると、こっそり絵を裏返して見た。

トメさんが言っていた絵の裏には、パソコンで打たれたこんなカードが貼り付けられていた。

R u 6 t ; y o y d @ 9 4

(そういうことか・・・)

咄嗟に檜野が手に取った一枚の絵。それは犯人を示すダイイング・メッセージだった。

帰り道、コナンは先程の現場状況を頭の中で再現していた。

店内に倒れる被害者、置き去られた衣服、白い花、ストラップ、そしてあの絵。4人のアリバイ。

決して難解な事件ではないと思う。ただ、何かがちぐはぐで足りない。まるで、ピースの欠けたジグソーパズルを完成させようとしているようだ。

B B B B B B

バイブレータの振動を感じてポケットから携帯を取り出す。光っているのは新一用の携帯。表示は“有希子”。

(やっべ・・・)

急いで小五郎から離れて通話ボタンを押す。

『新ちゃん？元気？』

ハイテンションな有希子の声が耳に飛び込んできた。思わず携帯を耳から数センチ離す。

「まったく、なんだよ。今、おっちゃんがいるから手短に頼むよ。」それにそっちは夜中だろ、何でそんなに元気なんだよ、と心の中で付け加える。

いつものように『なによそれが美人の母親に対する態度？』とひとしきり文句を言った後、彼女は本題を切りだした。

『それでね、今年は優作のナイトバロンシリーズベストセラー10周年なのよ。こっちでパーティーするんだけど、新ちゃんも来ない？せっかくだしい。もちろん、遠い親戚ってことで♪』

はあ・・・コナンは彼女に遠慮することなく盛大にため息をついた。この人は自分の息子が置かれている状況を本当に理解しているのだろうか。それとも、“あえて”こういう態度をとるのか。

「母さん・・・。“江戸川コナン”がパスポートを取るのは無理だよ。そうそう元にも戻れねーし。だからパス。」

『そうだったわね。残念だわ。新ちゃん、最初のベストセラー記念の時しかパーティー出てないものね。確か、あれはあなたのた』

「おい、コナン！早く来い！」

20m程先の交差点に小五郎が少しイライラした様子で立っていた。

「はーい！・・・おっちゃんが呼んでるから切るな。父さんによろしく。」

有希子の電話でせっかく組み立てていた思考が完全に途切れてしまった。

（最初からやり直したな・・・）

事務所の扉を開ける。時計を見れば、もう8時である。コナンも小五郎も何か大事なことを忘れているような気がしていたのだが・・・。

「一体どこに行ってたのよ！」

二人ともこっそり油をしばられたのは言うまでもない。

もう一人の主人公

ある町の、ある高校の、ある教室。

「こらゝ待ちなさい、バ快斗！」

「んだよ、アホ子！」

今日も名物カップルの二人が壮絶な追いかけっこを繰り広げている。細い体のどこにそんな力があるのかと疑いたくなる力強さとスピードでモップを突き出す女子高生と、壁や天井まで文字通り教室中をひらりひらりと逃げ回る男子高校生。

「アホ子って言うなあゝ！」

「おめーだってバ快斗って言ったじゃねーか！」

よくよく考えればいろいろな意味でもものすごく異様な光景なのだが、クラスメイトは言うまでもなく学校全体が慣れっこになってしまつて誰も気にしない。

慣れとは恐るべきものである。

『黒羽快斗君、至急校長室まで来てください。』
はあ？と快斗が一瞬放送に気を取られると、青子のモップが顔の脇を掠める。

「一体何をやらかしたのよ！」

「オレが知ってーよ！」

（いや、心当たりはあり過ぎるんだけど。やっぱり、この前校長室の窓にタネ仕掛けたのは良くなかったか？それとも屋上から紙吹雪がダメだったか？いや、あの後ちゃんと掃除はしたから違うな。それとも・・・）

キッド・・・？そりゃねーだろ。）

年がら年中、学校でのマジックショーに明け暮れている快斗は――白い翼を広げるようになってからその回数はめっきり減ったが――大がかりな仕掛けのためにしばしばお叱りを受けている。

その他にも遅刻、居眠り、サボり、早退etc・・・要は問題児である。

とりあえず一時休戦して快斗は校長室に向かった。

「失礼しまーす。」

と声をかけて中に入ると、校長の他に男が二人。でっぷりとした中年の男と、少し頼りなさそうな若い男だ。

（って警察！？二課じゃないけど、確か一課の目暮警部と高木刑事・・・。オレ、そーいう方面のこと何かしたか？）

IQ400の頭をフル稼働させても警視庁一課の強行犯三係にお世話になるようなことは思いつかない。

それよりも驚いたのは二人の反応である。

「「工藤君!？」」

どうやらあの高校生探偵の工藤新一と快斗を見間違えているらしい。（まあ、素顔で変装できるくらいだからな・・・。）

このまま“工藤”で通してやろうか、などと言う悪戯心が一瞬頭をもたげたが、そんなことをしたら後がいろいろ面倒臭すぎる。ここはきちんと否定しておかなくてはならない。

「あ、いや、オレはこの生徒で・・・黒羽快斗です。」

快斗の言葉で目暮は素早く刑事の顔を取り戻したが、高木は「しかし良く似てるなあ・・・」と呟いている。

（あんたの顔借りた時はひどい目に遭ったぜ、高木刑事・・・。）
サッカーボールがのめり込んだ鳩尾と、したたかに打った背中
の痛さを思い出して快斗は心の中で顔をしかめた。超の字がつく
生意気な偽小学生の顔が脳裏をよぎる。

「あーそうか。突然すまないね。わしは、警視庁の目暮だ。こっちはわしの部下の高木君だ。」

「あの、刑事さん。うちの生徒が何か・・・。」
校長は真っ青で冷や汗びっしょりだ。呼び出しを受けたのは間違いなく他にはいないであろう異色の問題児である。無理もない。快斗も内心困っているのだがそこはポーカーフェイスでスルー。

「すみません。そこは捜査に関わることなので・・・。」

関係者だけで話したい、と目暮の要望で校長は退室。校長室にいるのは目暮、高木、快斗の3人だけだ。
室内になんとなく重い空気が流れる。目暮が口火を切った。

「さて、黒羽君。君は米花町の“マジックアワー”でアルバイトをしているね？」

「はい、そうです。」

（やっべー！話ってそっちか。でもそれだけで警部のお出ましか？）
常識的に考えて、高校生がバーの夜間バイトというのはよろしくないことくらい快斗だって分かっている。

「昨日、そのオーナーである檜野さんが殺されたんだ。」
「えっ！」

思わず瞳が揺れてしまった。“殺された”という言葉がやけにはつきりと、そして何度も頭の中で再生される。死んだのではなく、殺された。

「それで、店員には全員話を聞いているんだ。・・・君が知っていることを話してくれないかい？」

快斗が一瞬見せた動揺を感じ取ったのか、彼の様子を窺いつつ高木が尋ねた。
わずかな時間でもポーカーフェイスを崩してしまった自分に心の中で舌打ちしてから彼は話し出した。

「・・・はい。オレがその店で働き始めたのは、3か月くらい前です。オーナーは親父、あ、父の知り合いで、前から誘われていたんです。」

実は、店の住所が米花町だと聞いてずっと断ってきたのだ。キッドの仕事も忙しいし、何より名探偵の本拠地に進んで近づくとういう気にはなれなかったからだ。しかし、3か月ほど前にどうしても言われて店に出て以来、快斗は持ち前の人を引き付ける魅力とマジックの腕前で大人気になった。今では仕事にやりがいを感じていた。店に出ている時は、自分はやっぱりマジシャンになりたいんだ、と“黒羽快斗”の夢を再確認することができる。はかどらない裏稼業に悩む快斗にとってはいい気分転換だった。

聴取は15分くらいで済んだ。目暮があおのストラップを取り出した。

「これが現場に落ちていたんだが、君ではないかね？イニシャル

は君のなので一応聞いておくが。」

当然、快斗に心当たりはない。彼は首を振った。

「いや、知りません。・・・それに、これ結構古いものですよ。本革みたいけど、この色は20年くらい経っている。このクリスタルだって小さいけど本物だし。結構高級品だな、こりゃ・・・。」

快斗は言葉を切った。目の前の刑事二人がぽかーんと口を開けて自分を見つめていたからだ。

「随分詳しいな・・・鑑識の報告とそう変わらないじゃないか。」
(げ、ついキッドの癖で・・・)

疑わしげな視線を向けられることには慣れていても、殺人犯にされては堪らない。

「いやっ、両親が装飾品とかに凝ってたもので！いろいろ見せられてきたから自然と鑑定眼が養われて。」

これは一応真実である。今から言えばキッドの戦利品だったであろう宝石、父がマジックショーで身につけるちよつと高級な時計やネクタイピンを解説付きで見せられていれば、ある程度目は肥えるものである。

「君のお父さんというのは、もしかしてマジシャンの黒羽盗一さんかい？」

「はあ、そうですけど。」

話がそれたことに内心ほっとしつつ、書類を覗きこんでいた高木の顔を見つめる。

高木はちよつと嬉しそうな顔をして言った。

「やっぱり！いやあ、僕は一回だけあの人のショーに連れて行ってもらったんだけど、面白かったなあ。

あっ……。」

目暮の視線に気づいた彼は慌てて口を閉じた。無論、快斗はその視線が意味するところを知っている。

「気にしないでいいですよ。オレも親父のことを聞くのは嬉しいから。」

そんな顔しなくていいのに、と彼は思う。父の魔法を知っている人には、ずっとその思い出を色あせさせないでいて欲しい。櫛野は快斗の知らない黒羽盗一を語ってくれる一人だった。それなのに……。

バツが悪そうに高木は視線を泳がせ、目暮はすっぱり話を終わらせた。

「それでは、黒羽君、また必要があれば話を聞かせてもらおうよ。あと、今日の話は人に漏らさないこと。では失礼。」

複雑な思いを心の中に押し込めて彼は表情を変えずに返事をした。

二人が帰った後、快斗は教室に戻る気になれず、屋上にいた。

（なんで櫛野さんが殺されなきゃなんねえんだ。）

彼は黒羽盗一に憧れていたと言っていた。マジックを愛していて、それ故に厳しいところや近寄りがたいところもあったが、快斗はそ

ういうところも含めて彼を慕っていた。楽しそうに父のマジックシ
ョーの数々を語ってくれる彼の中に、父親の影を見たかったのかも
しれない。彼に父親を重ねていたのかもしれない。

所詮、自分はまだまだ子供。父親を超えるどころか追いつくことす
ら遠い。

拳で金属のフェンスを思いっきり叩いてみる。ガシャンという派手
な音がして、手がかなり痛かったただけだった。快斗はひっくり返っ
て頭上を流れる白い雲をぼんやりと眺めた。

（ダメだ！今日は仕事、仕事。）

今夜は米花博物館に予告状を出している。ターゲットはどこぞの王
朝が所有していたとかいう由緒正しき大粒のルビー、“夕陽の雫”
だ。

「『白き罪人、追憶の夜叉が降らせし鉄の雨に追われて飛び立たん。
悲劇の輪廻が始まる時、過去が現在を襲い、現在が過去を救わんと
する。』怪盗キッドさんは、今夜は家で寝ていた方がいいよね？」

こんな意味不明のセリフをわざわざ屋上まで言いに来る人間は彼の
知る限り一人しかない。紅子の何もかも見透かすような（もとい
見透かしている）瞳が快斗を射抜く。探偵たちと似ているようで、
違った光を持つ瞳。風すらも吹くことを遠慮しているような緊迫感
があたりを包んだ。その空気を打ち崩すように快斗は碎けた調子で
言い放つ。

「だーかーらー、オレはキッドじゃねーってーの。」

（いっつも仕事の前に不吉なんだよ、お前は・・・。）

無駄だと分かっている、絶対に認めるわけにはいかない。

「ならばあなたがキッドだとして聞いて。今夜、危険にさらされているのはあなたの命・・・せいぜい気をつけることね・・・。」

いつもにも増して不吉な紅子の予言に快斗はポーカーフェイスの裏側で眉をひそめた。

（なんだよ、今日に限って・・・。）

不思議に思うと同時にかえって気持ちが落ち着いた。

（だったらその“運命”って奴を変えてやるよ。）

よつと勢いをつけて立ち上がる。上には抜けるような青空が広がっていた。

今夜は、満月。きっと美しい月が出ることだろう。

不可思議な輝きでビッグジュエルの如く人々を魅了する夜の女王はいつも怪盗に微笑んでくれた。

「待ち受けている未来にビクついたって何も始まらないだろう？・・・キッドなら逃げたりしないぜ？」

そう言う彼は、月夜を翔る、怪盗の目をしていた。

危険なお仕事

P M 9 .. 5 5 米花博物館

「いいーいかー、奴の予告まであと5分だ！各自、持ち場の確認を怠るなあああ！」

「おおー！」

一斉に拳を突き上げる男たち。気合い十分の中森警部率いる機動隊と警官隊が警備を固めている。

（今日も気合い入ってるな。まあ、その方がやりやすいんだけど。）

快斗は無線を聞きながら予告時間を待っていた。

いとも簡単に傍受されてしまう警察の無線ってなんなのだろうか・・・。

それもキッドが如何に天才的犯罪者かという証明なのだが。

（さあして、今日もいっちょ派手にいきますかー！）

5, 4,

（ショーの・・・）

3, 2, 1

（始まりだぜ！）

0！

派手な煙幕や爆竹が噴き出す。煙が収まった時、中森警部たちの目の前に立っていたのは輝く宝石を手中に収めた白いタキシードにシルクハットの気障な奴、怪盗1412号。人々は彼をこう呼ぶ。

「き、キッドおおお！」

「夕陽の雫、確かに頂きましたよ。」

これだけ大勢の機動隊やら警官隊に囲まれても、口元に余裕の笑みを浮かべる怪盗を前にして中森警部の額に青筋が立つ。今にも血管が音を立てて切れそうな勢いである。

ギャラリーは大喜び。たちまちキッドコールが沸きあがる。

さらに2、3本青筋が増えた彼に、キッドがトドメの（余計な）一言。

「過度のストレスは寿命を縮めますよ、警部？」

警部はキレた。そして、咆えた。

「確保おおおおお！！！」

包囲網が狭まったその瞬間、

「では皆さん、美しい月が見せる魅惑の夢でまたお会いいたしましょう。Good night！」

気障なセリフと共に煙幕が噴き出しキッドの姿が消えうせる。ガラスの弾ける音がして、窓の外にはハンググライダーの白い影が舞っていた。

「怯むなあああ!! 追えええええ!!」

警部の絶叫に機動隊が散っていく。

煙幕やら怒声やらで、一人屋上へ上がっていく隊員には誰も気づかなかった。

「警部にもいい加減学習してもらいたいよ・・・。」

月明かりに照らされる屋上で、一人呟く怪盗。宝石を月にかざすが、今日もハズレ。

（そう簡単に見つかるもんでも無いしな・・・。）

分かっているけれど、もどかしい。怪盗になることを決めた夜、先がこんなに長いとは、苦しいとは思っていなかった。忌まわしい伝説を葬り去るまで、白い影が封印されることはない。

（いけねー、ついネガティブになっちゃうな〜）

自分で自分を笑い飛ばすのも最近はやけに空しい。帰ろうか、と立ち上がった時、殺気を感じた。

いつもの張りつめたプロ集団の気配ではない。感情に支配された心が放つ殺気。

（なんだ・・・？）

次の瞬間、2 mほど離れたコンクリの床が弾けた。流石の怪盗も顔が引きつる。

バタバタと背後で足音がしたかと思うと、精鋭部隊を引き連れた警部が現れた。

最低のタイミングだ。キッドにとってではなく、警部たちにとってである。

「わーはっはっは！キッド！わしが何度も同じ手に乗るとでも・・・」
「伏せろ！」

（なんでこういう時に限って中途半端に引っかかってくれねーんだよ！）

キッドの声が飛ぶ。何が何だか分からない警部たちは2秒後にやってきた銃弾の嵐に慌てて身を伏せた。
弾はとめどなく降ってくる。

（おいおい、随分乱暴だなあ・・・）

とりあえず、この状況をなんとかしなくてはならない。自分は平気でも警部たちに流れ弾が当たってしまう。

キッドは閃光弾を落とし、すぐに煙幕弾も落とした。光と煙に包まれる屋上。

やっと周りが見えるようになった中森警部たちが見たのは、丁寧に白いハンカチに包まれた“夕陽の雫”と

『目当ての宝石ではなかったのでお返しします。怪盗キッド』のカード。それに無数の弾痕だった。

「しまった、また逃がした・・・。」

結局盗まれなかった宝石を見て一安心するわけでもなく、弾痕を見て震えあがるわけでも、事件性を疑う訳でもなく、キッドを取り逃がしたことだけを悔いる中森銀三は、やはりどこまでも“キッド専任”なのであった。

翌朝。教室に入った快斗に真っ先に声をかけてきたのは紅子だった。

「生還おめでとう。黒羽君。」

快斗はいつものように「何のことだか。」とはぐらかしていつてしまう。

（黒羽君……。あなたは“宝”を守り抜けるかしら……。）

青子と屈託なく笑っている快斗に面白がっているような、しかし心配しているような、複雑な視線を送る紅子だった。

今日のお告げは言いそびれた。いや、言わなかったのかもしれないし、言えなかったのかもしれない。

聞かなかったことは快斗にとって幸運だったのか、それとも不幸だったのか。

『仮面を脱ぎし白き罪人を狙うは追憶の夜叉が手先なり。罪人はその宝の盾となり、赤き闇へと迷い込む。

時の流れに逆らいし光の魔人、白昼の罪人と遭遇したり。』

真昼の影

太陽はまだ高い位置にある。土手に生える背の高い草が短い影を作っていた。

ぽかぽかと心地よい日差しにひんやりした風が気持ちいい。こうなれば、欠伸の一つも出るものだ。

「ふあああゝ」

黒羽快斗は盛大に欠伸を漏らした。昨日は何だかんだで寝たのは明け方。テストなんて寝ぼけ眼で受けたってどうってことないが、とにかく眠くて仕方ない。

そうとは知るはずもない中森青子がそんな彼を横目で睨む。

「もう！テスト時間中あれだけ寝ても寝足りない訳？」

「しゃーねーだろ。寝みーもんは寝みーんだから。」

江古田高校は今日からテスト期間。高校生の二人がこんな時間にこの土手を歩いているのはそういう訳なのである。いつもなら川べりで遊んでいる小学生の姿もない。代わりに、川べりでは町内会のボランティア清掃が行われている。のんびりとした老人たちの笑い声や、賑やかな主婦のおしゃべりが聞こえてきた。

日光が川面に反射してきらきらと光る。青子が立ち止まってその様子に目を輝かせた。

（まったく少女趣味は昔から変わんねーな。）

彼女に半ば呆れながら快斗もまた立ち止まった時だった。土手の向こうに確かな殺気を感じる。彼の目が草陰に蠢く人影を捉えたのはほんの一瞬だった。考えるよりも先に体が動いていた。快斗が青子の体を抱えて反対側の土手に転がりこもうとするのと、数回の破裂音が静かな土手を揺るがすのはほぼ同時だった。

白昼夢。3流の刑事ドラマのような常套句が頭に浮かぶ。

そのまま二人は草ぼうぼうの土手を転げ落ちる。やっと止まったところで、青子は何が何だか分からないまま目を開けた。自分が転がっているのは通学路の土手。自分に覆いかぶさっているのは幼馴染。

そこまで理解して青子は快斗を押しつけようとした。

「ちょっと快斗・・・？」

グラリ、と快斗の体が力なく揺れる。彼女が見たのは、ぐったりと倒れている快斗の姿だった。

どこからかパトカーのサイレンが聞こえてくる。誰かが通報したのだろうか。

（アレが近づいてきてこんなにはっとするなんて・・・。）

普段はありがたくない追いかけっこの始まりを告げるサイレンも、今日ばかりはありがたい正義の音だ。

遠くになっていく意識の中で、快斗はふと、そんなことを考えていた。

「快斗、快斗っ」

「だい・・・じょ・・・ぶ・・・」

快斗は青子の呼びかけにやっとそれだけ答え、氣力を総動員して笑ってみせる。

それが限界だった。

あまりにも唐突過ぎた狙撃に思考がついてこない。

ぼうっと彼女の顔が赤く霞んだかと思うと、彼の意識は闇の中に落ちて行った。

そう、『赤き闇』へと。

真昼の影（後書き）

やっと再開できました。

なお、すでに投稿済みだった各話もかなり改稿したので、是非最初から読み直して頂ければと思います。

これからもノロノロと進みますが、よろしくお願いします。

刑事である前に

警視庁捜査二課、中森銀三警部はデスクで書類整理に追われていた。昨日のキッドの犯行に関する報告書だ。

今では何人もの部下を抱える彼も、この仕事だけは自分でやると決めていた。

怪盗1412号、通称怪盗キッドと呼ばれる不思議な犯罪者は、彼が若かりし頃より追ってきた彼だけの獲物であり、彼の刑事生活そのものと言っても過言ではない。

「ぬうう……。次こそは、必ずお前をお縄にしてやる！」

書類に貼り付けられたキッドの望遠写真を睨みつけながら高らかに宣言したその時、胸ポケットが小さく震えているのに気がついた。

「青子？」

ディスプレイに表示されたのは娘の名前。それにメールではなく電話だった。

彼は首を捻った。娘はいつも仕事の邪魔になることを心配して、電話だけはしてこなかったのだ。

何か悪い予感を感じつつ通話ボタンを押す。案の定、耳に飛び込んできたのは今にも泣きそうな娘の声だった。

『お、お父さん……。どうしよう、どうしよう……。！』

「落ちつけ青子。何があったんだ？」

『ひっく……。快斗が……。うっ……。快斗があ……。！』

「快斗君がどうかしたのかっ。」

いくら聞いても青子の答えは要領を得ない。何とか彼女が江古田中央病院にいることを聞き出すと銀三は上着を掴んだ。

「おいっ、鈴木！あとは任せた！」

二課を飛び出した途端、ちょうどドアを開けようとしていた目暮警部にぶつかりかけた。

「中森君。君を探していたんだよ。」

いつになく真剣な彼の声も、今の銀三の耳には入らない。

何といっても、最愛の娘の一大事なのだから。

短く詫びを言って彼の脇を通り過ぎようとした銀三を目暮の一言が引きとめた。

「青子さんと黒羽快斗君のことなんだ。」

3分後。目暮と銀三を乗せて、高木が運転するスカイラインは国道を突っ走っていた。

「高木巡查部長！もっと出せんのか！」

「せ、制限速度ぎりぎりですよ。」

銀三の剣幕に高木があわあわと答える。シートベルトを引きちぎらんばかりに銀三は身を乗り出していた。

江古田中央病院に着くや否や、車から飛び降りるようにして中へ駆け込んだ銀三は手術室の前にあるベンチでぼんやりと座っている娘を見つけた。

「青子！」

「お父さん・・・！」

気が緩んだのか、静かに涙を流す娘の肩を銀三は強く抱いた。

娘の快斗に対する気持ちは薄々気づいている。

恋愛感情なのかどうかは知らないが、とりあえず気の置けない友人の一人であることは確かだ。

彼の手が生み出す魔法に魅せられる娘はいつだって楽しそうだった。職業柄、そして8年前の経験上、いつも側にあって当然のものなど何一つないと良く分かっているはずだった。

魔法使いのようだった彼の友人は、現実的で無粋な事故で命を落とした。

その息子は、身勝手に荒んだ何者かによって危険にさらされている。世の中の理不尽さに言いようもない怒りが込み上げてきた。

「快斗は大丈夫だよ。風邪も引かないバカなんだから・・・。」
自分に言い聞かせるように呟く娘の言葉が一層彼の気持ちをざわつかせた。

赤いランプが消え、手術室から医者とストレッチャーが姿を現した。青子は銀三の胸からさっと離れてそちらに駆け寄る。

「大丈夫ですよ。気を失ったのは軽い脳震盪ですね。麻酔のせいではばらく眠っているでしょうが、心配ありません。」

まだ若い外科医の言葉に青子の顔が少し明るくなる。そのまま快斗に付き添って病室へ向かう娘の背中を銀三はどこか寂しい思いで見つめていた。

（いかん、こんな時に不謹慎だな。）

父の心を刑事の心へと切り替えて、銀三は目暮に向き直った。

「で、この件もお前が追っている殺人に関係あるっていうんだな？」

「まだ分らん。しかし、絶対に犯人は挙げて見せるよ。」

目暮の押し殺したような真剣な声に、銀三は努めていつもの調子を保とうとした。

「当たり前だ。それはお前の管轄だろう、目暮のタヌキ。」

ぶっきらぼうな言葉の裏に目暮は課の違う同僚の警部が自分を信頼してくれていること読み取った。

それにしても、犯人は何を思って人を傷つけ続けるのか。

この事件に限らず、数多くの連続殺人を扱ってきた目暮にとって理解できないことの一つだった。

理解しようなどと考えること自体が間違っているのかもしれない。

しかし、犯人の自供を聞いて納得できたことは一回もない。

同情すべき境遇の犯人もいた。加害者が犯人を相当に苦しめていた事件もあった。

解決の手段に殺人を選ぶ人間の心理は、同じ人間として納得できなかった。

やり切れない思いで見上げた窓の向こうに見える空は茜色に染まっていた。

日暮れの侵入者

眩しい西日が差し込む探偵事務所で、事務所の主と居候の小学生は唸っていた。

彼らが見つめているのは分厚い書類の束と数十枚の写真。無論、昨日の事件の資料である。

どうやら小五郎は、考えることに必死でコナンと一緒にあって資料を読み漁っていることに気づいていないらしい。眉間にしわを寄せて、ぶつぶつ言っている。

「どう見たって外部犯だろうがな・・・、楠本さんが嘘をついてるとすりゃ彼女が犯人で決まりだな・・・。」

犯人が外に逃げたことを立証するのは楠本の証言のみ。彼女が嘘をついているとすれば、彼女が犯人、もしくは何らかの事情を知っていると見ていい。

「けど、アリバイがなあ・・・。」

犯行時刻の正午頃、楠本は笹山と打ち合わせをしていた。きちんとレシートも残っているし、間違いない。

間違いないのだが、間違っている気がする。コナンは説明できない矛盾の存在を確信していた。

事件当時の現場が鮮やかに蘇ってくる。人間誰しも見ているものは同じ。当たり前的事实から隠された真実を引き出せるか否かが凡人と名探偵の違い。

「なんかおかしいんだよな・・・。」

ガラスが割れる音に続く悲鳴、ごっそり抜け落ちた乾いたガラス。

砕けたコーヒークップ。

被害者が持っていた絵とその裏に示された暗号。

犯人がわざと残したと思われるようなパーカー、白い花。

犯行を決定づける鍵は、一体どれなのか。

考えながらも一つのファイルに手を伸ばしたが、それが横からひよいと取りあげられた。

目を上げるとそこには小五郎の顔。

「ガキが何やってんだ？ ん？」

見つければ、次に起こることは目に見えている。コナンは問答無用で事務所からポイされた。

「まったく、もう少しだったのに・・・。」

文句を言っても始まらない。こうなれば違うアプローチで捜査するのみだ。

階段を駆け下りて通りに飛び出した。無論、向かう先は現場だ。

小さなバーは昨日と同じ状態で保存されていた。黄色いテープと警官を完全に無視してコナンはこっそり中に忍び込んだ。

被害者は会計用のカウンターの背中から倒れ込むような形で倒れていた。白いテープが人型に貼られている。

室内のエアコンは20℃に設定されていたが、ガラスが割れた際に外の冷気が強い風と共に流れ込み、コナンが駆け付けた時には室内の温度は外と大して変わらなかった。

（何か引っかかるな・・・。）

考え込みながら店の奥にある扉を開ける。そこは倉庫のようだった。いくつかの袋や箱、毛布に埋もれるようにして小さな冷凍庫が鎮座している。

開けてみると、ドライアイスや氷など今の季節にはあまり見たくな

いものが入っていた。

量から考えて大方演出用だろう。扉には最後に買い足した日付が書かれている。

店に戻った途端、彼は何かに思いっきり躓いた。

ヤバいと思う暇もなく、派手な音を立てて隅に置いてあった加湿器が倒れてがらがらと音を立てて分解する。

「誰だッ！」

外から警官の鋭い声が飛んだ。往生際の悪い探偵は、この期に及んでもなお証拠になりそうなものを探して床を這いまわっていた。空き巣もびっくりの執念である。

そんな努力も空しく頭脳が大人とは思えない非常識な探偵は、日本の治安を守る至って常識的な警官に確保されたのである。当然のことながら、彼を待っていたのは警官、小五郎、蘭によるお説教のフルコース。

しかし、皆さんもご承知の通りそんなことで彼の行動力は衰えたりしない。

まったく懲りない侵入者である。

日暮れの侵入者（後書き）

今年中にと1話投稿したいです・・・。

闇の境界線

体が軽く、ふわふわと浮いているような感覚に包まれている。心地よい暖かさの中に身を委ねて最高に落ちついた気分だ。そんな至福の空間に流れ込んできた冷たい風を感じて、快斗は目を開けた。ここは病院だろうか。快斗が横になっているベッドの脇に青子が黙って立っていた。俯いているせいで表情は良く分からない。

（おっかしいな・・・撃たれたんだよな、オレ。）

撃たれたにしてはどこにも痛みを感じない体を不審に思いながらも未だに黙っている青子に声を掛けた。

「青子？」

彼女は答えない。その代わり顔を上げて、全く彼女らしくない表情をこちらに向けた。

泣いているような、怒っているような、笑っているような顔。

和風に言えば能面、洋風に言えばポーカrfフェイス。

いつも表情を生き生きと目まぐるしく変える青子を見慣れている快斗は少し面食らった。

「おめーは平気だったのか。」

口にしながら快斗はまたおかしいと思った。こんな時、いつもの自分ならひねくれたからかいの一つも言ってやれるのに。いつもの青子なら子供っぽく本気で怒るか泣くかするはずなのに。

二人の間に目には見えない深くて広い溝ができたようだった。

青子の唇が微かに震えた。その言葉を聞き逃すまいと快斗は身を乗り出した。

「・・・キッド。」

「あ？キッドがどうした？」

答えるのが少し早すぎた。心臓の鼓動が早くなる。顔に出ていないことを祈りながら必死で平常心を保とうと努力する。

おかしい。いつもの快斗ならこのくらいの不意打ちでここまで心を乱されないはずだ。

「キッドは、あなたなんだよね。」

「まったく、どこから拾ってきたネタだ、それ。大体、オレが・・・彼の言葉はそこで途切れた。青子の突き出された右手の上に輝いていたのは銀のモノクル。

正真正銘の本物だった。

（そんな・・・それは隠し部屋においてあったはず・・・。）

混乱して上手い言い訳も思いつかない快斗を真っ直ぐに見つめて、青子もう一度口を開いた。

「落し物だよ、怪盗キッド。」

彼女の感情のない声にかぶさるようにサイレンの音が響いてきた。自分の口からきちんと説明したいと思うのに、言葉が出てこない。部屋を出て行こうとする彼女の背中にやっと呼びかけた。

「青子っ」

「呼ばないで！」

初めて青子が感情を表した。それは憎しみに近い激しい怒り。

「知らない方が良かったよ・・・。快斗を返してよ、キッド！」

「オレは・・・」

鋭い音が狭い空間に響き渡る。青子の手を離れたモノクルは思い切り床に叩きつけられて砕け散った。

目の前が真っ暗になる。暗闇の中から声が聞こえてくる。ずっと忘れたことのないあの言葉が。

『いつ何時たりとも、ポーカーフェイスを忘れるな。』

今はその言葉さえも恨めしい。

何で、どうして怪盗になったんだ。18年前のパリで、何があったんだ。

答えろよ、親父。

纏わりつくような暗闇と格闘しながら快斗は叫んでいた。

返事の代わりに低い轟音が腹の底に響く。

続いてつんざくような悲鳴が聞こえ、深紅の火柱が見える。

快斗の心は震えた。8年前、最期の舞台。一瞬ですべてを奪う悪夢。

“すべてを奪う悪夢”

行き場のない怒りと焦りと悔しさが叫び声となってほとばしる。

「あああああああ！！」

快斗は闇に堕ちて行く。堕ちて、堕ちて・・・。

「快斗。」

彼を呼ぶのはキッドを何よりも嫌う彼女の声だ。

(あおこ・・・)

「快斗っ」

不意に意識が引き戻される。恐る恐る目を開ければ、白い天井と見慣れた顔が目に見え込んできた。

思わず飛び起きた快斗は腹の痛みに息が止まりそうになり、再びベッドに沈みこんだ。

気づけば汗びっしょりで、心臓は未だに早鐘を打っている。時計を見れば、朝の10時を回っていた。

「オレ、寝てたのか？」

掠れた声を何とか押し出すと、青子は安心したように表情を和らげた。

「うん、昨日の夕方から。夜に熱が出たって看護師さんから聞いたけど少しは下がったかな。」

青子の手が快斗の額に置かれる。一言くらい言い返したかったが余裕がない。ひんやりと冷たい彼女の掌を大人しく受けるしかなかった。

「すごい驚かされてたよ、大丈夫？」

大丈夫な訳がない。今はとにかくあれが夢だったことに感謝したいが、現実になったらと思うと気が気でなかった。彼女の方を見ずに快斗は低く呟いた。

「おめーは怪我してねーか。」

驚いたように青子の目が見開かれる。

「え、うん。快斗のおかげで……。ありがと。」

「ん。」

いつもより少しだけ素直な自分と青子。

これはこれで良いのだが、やっぱり快斗は快斗でしかない訳で。

「つかさ、今回改めて思ったけど……。おめーその胸どうにかなんねーのかよ。」

「……。はあ？」

こんなことでもなけりゃあんなあからさまに抱きしめたりしねーか

らさあ、と掠れた声でとんでもないことを呟く怪我人を前に、青子の拳が震えだす。

（素直にお礼を言った青子がバカだった・・・。）

一方、快斗はふざけた言葉の裏で至って真面目なことを考えていた。

（渡さねえよ。“黒羽快斗”の日常だけは・・・。）

怪盗キッドはあくまでも目的を持った仮の姿。そこにスリル満点の興奮はあっても平穏な時間はない。

探偵との頭脳戦は捨て難いが、それも日常には代えられない。

思い出したくもない悪夢は、彼に何を問いかけているのだろう。

その後、青子の拳が快斗に飛んだのかどうかは皆さんのご想像にお任せするでしょう。

闇の境界線（後書き）

今年最後の投稿です。

皆さん、良いお年をお迎えください。

毛利探偵事務所

「また事件ですと!？」

「ああ、被害者はわしらが先日話を聞きに行った黒羽快斗君。命に別条はなかったが、10日程の怪我だそうだ。」

渋い顔で言う目暮。犯行を止められなかったことを悔いているようだった。

「これは、樫野氏殺害と繋がる連続殺人とみて間違いないだろうな。」

凶器は競技用の散弾銃。ライフルなどに比べれば殺傷能力は低いが、至近距離で食らえば確実に怪我をする。

また、犯人は思いもよらないパトカーの出現に相当焦っていたはずにもかかわらず、黒のパーカー、白い花をまたもや現場に残していたというのだ。真昼間で逆に通行人は少なく、犯人らしき人物を目撃した人はいない。

小五郎は顎に手を当て、ソファアの背に深くもたれかかった。

「では彼は2人目の犠牲者という訳ですな。」

「いや、3人目だ。」

目暮の言葉に、小五郎もコナンも怪訝な顔をする。それを受けて目暮は一冊のファイルを取り出した。

「数日前に、怪盗キッドが狙撃されたという事件があったのは知っているな? キッドを狙撃したと見られるオフィスビルから見つかったんだよ。黒羽君を狙ったのと同じ弾丸、そして白い花が……。」

「・・・犯人は殺しについては素人か。」

「え、どうしてだい？」

コナンの思いっきり子供らしくない呟きに高木が身を乗り出してきた。

慌てて営業用の無邪気な表情を作って話し出す。

「だって、キッドは見晴らしのいい屋上にいたんでしょ？昨日は満月で明るい夜だったし、警察の照明もあったみたいだから相当明るかったんでしょ？あの辺はビルが多いから、わざわざ遠くから狙撃する必要もないよね。それにキッドの白い衣装は夜でも見やすくて狙いやすい。これだけ好条件がそろっているのに、たくさん弾を使っただけで一発も当たらないってことは、相当射撃が下手か慣れてないってことだね？」

一息に言いきったコナンの筋が通った推理に、高木は素直に感心し、目暮はその事実について考え始め、小五郎は拳を宙に泳がせて固まっていた。

そんな3人をよそにコナンは一人自分の考えに耽っていた。

（しかし・・・犯人はどうしてキッドを狙ったんだ？ここ最近、奴は盗った宝石をきちんと返しているし、恨まれそうなのではないはずだが・・・。）

コナンが知る限り、今までにキッドが狙われた理由はターゲットそのものに関するのと、彼が偶然居合わせた事件によるものだ。恨まれない泥棒というのも妙だが、大体の人間は宝石を返してもらえればそれで良しとしている。余程のことがない限り、怪盗キッドという犯罪者は命を狙われたりしないはずなのだ。

（だとすれば今回の事件、過去に手掛かりがあるのか？）

考えてふと気がついた。自分はキッドのことを世間並みにしか知らない。世間で推定されているよりは若いことや、素の顔立ちが工藤

新一に似ていることは分かっているが、それだけだ。

一方のキッドはどこから知ったのか江戸川コナンⅡ工藤新一の真実を知っているようだった。

（フェアじゃねーだろ。）

ついキッドに捉われかけたコナンは高木の報告で事件に引き戻された。

「被害者の黒羽快斗君は江古田高校の2年生。3か月前から“マジックアワー”で土日のアルバイトをしていました。榎野さんとは父親同士が知り合いだったそうです。」

「『だった』ってどういうこと？」

コナンは脳天に小五郎の拳骨を食らいつつも必死に話に割り込む。

「彼の父親は世界的マジシャンだった黒羽盗一さんだ。8年前に事故死してしまっただけだね……。」

黒羽盗一。かつて、東洋の魔術師と呼ばれた稀代のマジシャンだ。

当時9歳だった工藤新一の記憶にもおぼろげながらニュースで騒がれていたことは残っていた。

「それで、これからあの店の従業員に話を聞きに行こうと思うのだが君も来てくれるかね。」

君は一応彼らと顔見知りだからな。」

目暮と小五郎の会話を聞きながら、コナンはこれまでの事件を振り返っていた。

犯人の狙いがいまいち掴めない。榎野直樹、キッド、黒羽快斗。この3人に何か共通点でもあるのだろうか。

流石の名探偵も頭を抱えるのだった。

疑惑と繋がり

40分後。目暮、小五郎、高木の3人は杯戸町にある木元の自宅前にいた。

こじんまりとした一軒家で、小さな庭がついている。

小さな柿の木が隅の方で枝を広げ、色とりどりのパンジーが咲き乱れていた。

インターホンを鳴らす但誰も出てこない。小五郎がイライラして言った。

「まったく、どこ行っただあの親父は……。」

「すぐ近くじゃない？ほら、コーヒーの入ったカップがテーブルに出したままになってるのがここから見えるし。」

……はい？

振り返った3人が見たのは、出窓にぶら下がって熱心に部屋の様子を伺っている小学生だった。

「コーナーン！な・ん・で、お前がここにいるんだ！」

怒りのあまり声が震える小五郎の拳をかわしてから彼は顔を輝かせて答えた。

「だって、ボクが車に乗っても誰も気づかないんだもん！」

彼のセリフは演技でも、表情は演技ではない。

彼の――工藤新一の――事件に対する思いが溢れているのである。その証拠に目は真剣だった。

そうとは知るはずもない小五郎は齒ぎしりし、目暮と高木は盛大に

ため息をついた。3人とも自分たちの間抜けさとコナンの好奇心にただ呆れるばかりだった。

それでいいのか警視庁。それでいいのか元刑事。

しかし、ついてきてしまったものは仕方ない。小学1年生の子供に一人で帰れとも言えない。

「いいか！大人しくしてろよ！」

「はい！」

小五郎の忠告に元気よくお返事。もちろん、大人しくする気などさらさらない。

（おっちゃんも学習しろよ・・・されても困るけど。）

そのうちに木元が帰ってきてやっと思査は始まるのだった。

「すみませんねえ。ちょっとコンビニに行っていました。あ、散らかっていますが気にしないでください。

今、妻が実家に帰ってまして・・・。」

そう断って通された部屋は確かに散らかっている。大量の段ボールとクッション材（俗にプチプチ）が放置されていた。テーブルにはトランプと簡単なマジックの道具が乱雑に積み上げられていた。

「大学時代は一応奇術研究会にいましたね。榎野さんは先輩なんですよ。」

言ってから木元はちょっと寂しげな表情をしてみせた。

榎野が既にこの世にいないことを思い出したのだろう。

目暮は第2、第3の事件について簡単に説明した。木元は心底驚いたようだ。

人の良さそうな彼が殺人を犯すようには見えない。しかし、真実は時に残酷で信じられないものだ。

だからこそ慎重に、一切の感情をかなぐり捨てて、冷静に事実を見つめなければならない。

昨日、一昨日の行動を聞かれた木元は考えながらゆっくりと答えた。「えーっと、一昨日は、店に関係する業者への連絡に追われていました。ずっとそこで電話とパソコンに張り付いてましたよ。昨日は午前中にちよっとスーパーまで買い物に行って、午後は作業の続きを。」

彼はわざわざ昨日のレシートを財布から取り出して目暮の前に置いた。

「ねー、パソコンに張り付いてたって、ずっとメールしてたの？」横から無邪気な声が割り込んだ。少し驚いた顔をして見せてから、彼は目を閉じて何かを思い出すようなポーズを取った。

「ああ・・・。酒や食材を卸している問屋や、店の従業員に。あと、ホームページにお知らせを載せたり。」

何なら履歴見ますか、と彼が立ち上げたパソコンのメールボックスには大量のメールをやり取りした形跡があった。特に、従業員とのメールの間隔は20分と空いていない。それが夜10時過ぎまで続いている。

（木元さんにキッドの件は無理か。）

コナンが考えていると、テーブルの上に置いてあった先程のレシートがふわりと落ちた。

慌てて椅子から飛び降り、拾い上げようとした彼はカーテンの陰にひっそりと置いてあるものを見つけた。

「おじさん！これ！」

「あん？」

現場に落ちていたのと同じ、ジャスミンの鉢植えだった。

「木元さん！この花どうしたの？」

勢い込んで聞くコナンにたじたじとなりながらも小五郎や目暮、高木が同様のことを聞きたい様子なのを見て彼は答えた。

「妻の郁子の趣味だよ。」

木元と妻の郁子はあのバーで知り合い、結婚。4年前に郁子の父が体調を崩すまではずっと働いていたらしい。彼女はガーデニングが趣味で彼女の育てた花は店や従業員の自宅など、至るところで喜ばれていた。

「それじゃあ、他の3人の家にもこの花はある訳ですね。」

「ええ、まあ・・・。」

店の鉢植えに花がむしられた形跡はなかった。この4人の中に犯人がいるとすれば誰かが花がむしられた鉢植えを持っているはずだ。わざわざ花屋等で購入しては足がつく。

ここで捜査の舞台は次へと移ることになる。

おかしな態度

10分後。4人は笹山のアパート前にいた。

米花博物館までは車で15分程。江古田の川原までは車で30分程かかる所にある。

ベルを鳴らすと彼はすぐに出てきて、さして驚いた様子もなく4人の中に招き入れた。

きちんと整頓された部屋は先程の木元とは大違いである。日当たりの良い窓辺にはあの鉢植えが数個並んでいた。これまたきちんと世話されているようで、どれも伸びやかに葉や花を広げていた。

「この前の件に引き続き、黒羽君も襲われまして。おそらく同一犯かと・・・。」

「彼はどのくらいで退院できそうですか。」

1週間程度だと分かれると笹山は少しだけ安心したような表情を浮かべたが、高木が昨日、一昨日の行動を聞き始めるとすぐに元の無表情に戻った。

「一昨日は、ずっと家にいました。夜の9時頃に木元さんからパソコンにメールが来て、2、3回やり取りした以外は他人と連絡を取っていません。昨日は、13時頃に柳さんから携帯に電話が掛ってきました。内容は店の復旧についてでしたかね。確認してもらっても構いませんが。」

人当たりの良い木元とは違い、彼は淡々と事務的口調で告げた。凶器の一つと見られる散弾銃についても尋ねたが、彼が所有しているものが盗まれたなどと言うこともないようだった。

一通りのことが聞き終わると、思い出したように高木が口を開いた。

「そう言えば、どうしてあなたはこの仕事を？」

笹山はふっと自嘲的な笑みを浮かべた。

「射撃じゃ食っていきませんよ。」

いくら腕が良くても、それだけで生活していくことはできない。射撃部を持つ実業団も年々減っていく。

彼は生活のために大学時代の伝手を頼って檜野の店に雇ってもらったという。

「ねえ、笹山さんって几帳面なんだね？」

コナンが口を開いた。入った時から思っていたが、この部屋はきちんと整理されている。され過ぎているほどだ。鉢植え、戸棚の中、ベッドの上に至るまで、乱れひとつない。

「え？・・・ああ。銃なんて物騒なものを扱っているからね。きちんとしていないと落ち着かないんだよ。」

「その割にクローゼットが半開きだけど？」

自然とその場にいた全員の目がそちらに引きつけられる。確かに、完璧に整理された部屋の中では半開きのクローゼットは目立った。

「あー、さっきまでちょっとそこを片づけていてね・・・って君！」
コナンがクローゼットを漁って何か黒いものを引っ張り出していた。

「そっそれは！！」

高木が驚きの声を上げた。コナンが取り出したのは現場に残されていたものと同じ黒いパーカーだった。

「おいおい・・・サイズやメーカーまで同じじゃねーか。」

「全く同じものとなると・・・」

小五郎と目暮まで疑わしげな視線を笹山に向けると彼は冷静な態度を一変させた。

「ちょっと待ってくださいよ！犯行現場に残されていたものと僕の手持っているパーカーが同じだからって犯人になってしまいうんですか！？第一、それは僕が自分で買ったものじゃない・・・。」

しどろもどろになっている彼の言葉をコナンが聞き咎めた。

「じゃあ、誰に貰ったの？」

彼は黙って戸棚の奥にひっそりと置かれている古い木製の写真立てを指した。

若い男女が腕を組んで笑っている。向かって左側にいる男は当然だが笹山だ。そしてその隣にいるのは・・・

「柳さん？」

柳百花だった。写真の端にプリントされている日付は半年ほど前。背景から見て、トロピカルランドらしい。

写真立ての右下には“H & M”と彫られている。

「彼女から、先月の誕生日にそれを貰ったんです。」

思いがけない人間関係だ。几帳面で潔癖症ともとれる性格の笹山に對して、柳はどちらかといえば適当な感じである。どうも釣り合わない。

そして、彼の態度も何かおかしいように思われるのだ。

触れてほしくないと言った感じでそそくさと写真をしまう。

自分の恋愛には疎いコナンもとい新一だが他人事には鋭い。

確証はないが、笹山は何か隠している。

（少なくとも、柳さんは笹山さんの“今”の彼女ではない・・・。）
今現在付き合っている女性の写真を戸棚の奥に押し込めておくのは不自然だ。

先月が誕生日なら、その時に撮った写真の一枚でも飾っておきそうなものだがそれもない。

写真が半年前から変わっていないのはおかしい。

（どうしてこんな嘘をつく必要があるんだ？）

彼が犯人なのか。しかし、アリバイを見ても彼に樫野氏殺害は不可能だ。

この時、コナンは自分が抱える引っかかりにまだ気づいていなかった。

おかしい態度（後書き）

あと2話程、このような捜査編が続きます。

嘘と真

20分後。小さなアパートのインターホンを鳴らす4人がいた。

そこは探偵事務所のすぐ裏で、現場の店にも近い。米花博物館までは車で10分、江古田までは30分程かかる。

しばらくして若干不機嫌そうな柳の顔が覗いた。訪問者が誰だか分かるかと、驚いたように慌てて鍵を開けた。

彼女の部屋はともカラフルで賑やかだった。

アジアンテイストとでも言うのだろうか。赤、黄、青など様々な色があちこちに織り込まれている。

いい加減聞き飽きた説明を聞き流しながら、コナンは室内を歩き回り始めた。

柳の部屋にもあの鉢植えが置かれていた。

(なぜ、この花なんだ・・・?)

確かに香りは良いのだが、あまり見てくれのいい花ではない。見て楽しむには地味すぎる。

どんな意味を込めて木元の妻、郁子はこれを育てているのか。

「一昨日の夜ですか？えーっと・・・お店の今後は分からないけれどもとりあえずみんなでフォローしようと木元さんに言われていたので、備品のチェック表を作っていましたけど。」

これです、と取り出したのはA4サイズのコピー用紙。

椅子、机、テーブル、カウンター、グラス、皿といった必需品からトランプ、カラーボール、マッチ、ドライアイス、毛布やクロスなどのマジックバーらしいものもあった。

「店の横に倉庫があって、そこに全部入れてるんです。もっとも、毛布なんかはもう虫食いだらけでまだあるのかどうかも分かりませ

んけどね。」

大して悪びれもせず笑って見せる彼女は相当に適当な性格のようだった。

昨日は笹山の証言通り、13時頃に電話をしたという。時間は10分程だ。

「それで、あなたと笹山さんが交際しているというのは本当ですか？」

高木が何気ない様子を装って聞くと、意外にも彼女は首を傾げた。

「彼がそう言ったんですか。」

「え？ ええ、まあ・・・。」

「じゃ、そうなんじゃないですか。」

意味不明の回答に困り果てた高木は目で目暮と小五郎に助けを求める。

「どういうことなんですか。はっきりしてください。」

「はっきりしてもらいたいのはこっちですよ。半年くらい前に別れ話みたいな雰囲気になってそれっきりなんですから。」

あのパーカーも同じ職場にいる人間として誕生日を祝ってやったに過ぎず、深い意味はないという。

これ以上この話をしているとややこしくて敵わない。

目暮は方向を変えることにした。

「それでは、被害者たちについて何か変わったことがあったとか、気づいたことはありませんか。」

彼女はしばらく髪を弄びながら考えていたが、徐に髪から手を離れた。

「そう言えば、樫野さんが妙なこと言ってたんですよ・・・。」
彼は毎年5月4日だけは必ず店を休みにする。それは柳が働き始めてからずっと変わっていない。

何のためかは分からなかったが、一度だけそれとなく聞いてみたこ

とがある。

樫野は寂しげにこう答えたらしい。

『自己満足の罪滅ぼし、かな。取り返しのつかない……。』
直後に客が入ってきてその話はそれっきりになってしまった。

「なんかこう・・・かなり真剣な感じだったので、私もそれ以上聞けなくて。」

コナンは顎に手を当てた。過去に樫野が何か仕出かしていたのなら、今回の件はそれに対する報復とも考えられる。

（被害者の方も詳しく調べる必要があるな……。）

そもそも連続した3件の事件は同一犯によるものなのか。

だとすれば、共通点は何か。

考えるコナンの横で柳はため息をついた。

「でもあの黒羽君が狙われちゃうなんて……。あんなに面白い子なのになあ。」

「黒羽快斗って人、そんなにいい人なの？」

コナンはの中で唯一黒羽快斗本人に会ったことがない。

小五郎が珍しく補足してくれた。

「ああ、俺も2, 3回会ったが、とても高校生たあ思っちゃいなかったな。こっちの話にもちゃんとしてくるしよ。手品は文句なしだったし。」

「ふーん。」

（どんな奴なんだろうな、そいつ。）

コナンは何故か彼に強い興味を覚えていた。

探偵の性

15分後。さらに移動して4人は楠本の部屋にいた。

米花博物館までは徒歩20分、江古田までは車で40分程だ。

ここまで関係者に話を聞いたのだから、彼女にも聞くのが筋だろう。次から次へと出てくる事件がらみの事実。これは犯人によって巧妙に張られた罠なのか。

各々の頭の中には何通りもの仮説がぐるぐると回っていた。

インターホンを鳴らすと事前に連絡はしてあったが、楠本は恐る恐るといった様子で扉を開ける。

楠本の部屋は女性の部屋にしてはとてもシンプルだった。壁際にベッドが置かれ、テーブルとクッションが中央に並べられている。装飾品や写真も少ない。

「あの・・・それで黒羽君は大丈夫なんですよね。ニュースでは“怪我をした”としか言っていないので。」

「ええ、入院することにはなりましたが命に別条はありませんよ。」そんな会話を余所にコナンの目が一枚だけあった写真に引きつけられる。

夜の高層ビルを写したスナップが入っている。鈴木財閥と肩を並べる大財閥、菱田財閥の社章が見える。

何処かで見た様な建物だったが、どこで見たのかは思い出せなかった。

彼女は小さな声で、しかし礼儀正しく順序良く自分の行動を説明して見せた。

キッドが襲われた夜、彼女もまた木元と同じ作業をしていた。

木元とは午後10時頃まで、パソコンメールで仕事内容を確認し合っていたという。昨日は昼頃に近くの東都銀行まで出かけていたらしい。

「窓口で手続きしましたから、防犯カメラとかに私が映ってると思いますけど。」

そして深々とため息をつく。

「私、怖いんです。榎野さんや黒羽君を襲った犯人がここに来るんじゃないかって・・・。」

殺人犯に遭遇してしまった者としては当然の心理だろう。

心なしか、彼女の顔はやつれているように見えた。

「大丈夫ですよ。僕たち警察が、しっかり警護しますから。」

高木の言葉に彼女は弱弱しく頷いた。

「ねー、お姉さん。」

聞こえたかわいらしい声に楠本は振り返る。コナン最大(?)の武器、お子様スマイルが炸裂した。

「あのお店の店員さんてさ、みんなあの時間にくるの?」

「ええ。あそこ、榎野さんの自宅スペースと隣り合ってるから、あんまり早く行くと迷惑になっちゃうのよ。」

いつ店員がやってくるかもしれない開店前の店内にとどまることは犯人にとってマイナスにしかない。

逆にいえば、その時間まで絶対に他人が現れないと知っていれば余裕で構えていられるのだ。

(つまり、犯人はそれを見越して何かしていたのか・・・。)

ふと窓際に目を遣ると、何も植えられていない鉢植えがあった。

楠本もそれに気がついたのか、照れたような笑いを浮かべた。

「あー、それね・・・せっかく木元さんの奥さんに頂いたのに枯らしちゃったのよ。うっかり外に出しっぱなしにしちゃって。」

本来、ジャスミンは熱帯の植物。暖かい部屋の中で育てなければすぐに枯れる。

それから2、3の質問を試みたが、彼女からこれ以上のことは聞き出せそうになかった。

4人の長い一日が終わった時、日はとつぷりと暮れていた。

「じゃあ毛利君、明日は黒羽君に話を聞きに行くからそのつもりでな。」

「コナン君、連れ回して悪かったね。」

遠ざかっていく車を眺めながら、コナンは考え込んでいた。

今回の事件に複雑なトリックは存在しない。

犯行時刻、現場に確実にいたのは誰かという証明ができればいいのだ。

しかし、それができない。

一人に絞れないのだ。常に複数の人間が現場にいることができるか、誰も存在できないかのどちらかだ。

（外部犯じゃねーってのは確かな気もするけど・・・しかしそうすると楠本さんが嘘ついてるってことに・・・。）

疑ってかかるのは探偵の性だが、すべてを疑っていたのでは証言など何の意味も為さないものになってしまう。終いには、全員嘘つきだったなんて結論にも達しかねない。

（事実が真実とは限らねえ。それに、真実が正しいとも限らない・・・。）

「コナン君！そこで何してるのー？」

探偵事務所の窓から顔を出したのは蘭。エプロンをしている所を見ると、夕食の支度をしているらしい。

「風邪引くわよ。寒いから中入ってきなさい。」

「はい！」

コナンが慌てて事務所の階段を駆け上るのを見届けたかのように、夕日は最後のきらめきを残して消えた。

街は夜に包まれる。真実も、罪も、知られたくない過去も、思い出したくない記憶も何もかも覆い尽くす、夜の闇に。

江古田中央病院507号室

「えーっと・・・あ、蘭ねーちゃん、507号室あったよ。」

扉の前にメガネをかけた少年とロングヘアーの高校生。もちろんコナンと蘭である。なぜ、二人がここにいるのだろうか。

話は数時間前にさかのぼる。

小五郎が快斗のもとへ事情聴取に行った際、手帳を忘れて行ったのだ。

聴取を終え、警視庁へ着いてからそのことに気づいた小五郎は部活がなかった蘭にお使いを頼んだという訳だ。もちろん、コナンは事件を調べたくて、ついでに黒羽快斗に興味があつて、くつついてきただけである。

意外にも病室からは元気な声が響いている。

「じゃ、また明日ね！快斗。」

「別に毎日来なくてもいいってーの。」

「何よ、せっかく来てあげてるのに！・・・明日はお魚クッキーでも焼いてこようかなあ。」

一瞬の空白があった。

「・・・アオコサン、わざわざ来てくださって感謝してマス・・・。」

「

「分かればよろしい！」

「はあゝ」

扉の外で、二人は呆気にとられた。

「コナン君・・・部屋、合ってるよね・・・？」

蘭が言うのも無理はない。コナンも自分が撃たれた時のことを思い

出す。

2日3日でここまで回復するのは尋常でない。まさに超人的としか言いようのない回復力。

事件に巻き込まれて凹んでいるかと思いきや、そんな様子もない。

(こいつ、本当に人か・・・?)

失礼なことを考えつつも、とりあえずノックして扉を開ける。

「こんにちは。失礼しま・す・」

蘭の言葉が途切れた。

一拍置いて。

「・・・新一!？」

「へ?・・・ええええええええええ!？」

コナンがここは病院だということを一瞬忘れたのは仕方ないことだろう。

目の前にはあり得ない現実が繰り広げられていたのだから。

『時の流れに逆らいし光の魔人、白昼の罪人と遭遇したり。』

「本当にすみませんでした・・・」

出会いから5分。ようやく冷静さを取り戻したコナンと蘭はひたすら頭を下げていた。

廊下一杯に響き渡るような声を出してしまった二人は、通り過ぎる看護師や患者たちの何事かという視線から逃げるように507号室に飛び込んで扉を閉めた。

「あ、あの・・・」

快斗と青子も目が点になっている。蘭も要件が言い出せなくなってしまうたし、コナンにもそれをフォローする気遣いはなかった。

復活が早かったのはやはり快斗である。

「あれ、取りに来たんでしょ？」

快斗の指差す先には小さな黒い手帳がある。

「え、そうですけど・・・どうして分かったんですか。」

（新一のハズない・・・けど、けど・・・！）

何もかも自分より先回りして分かっちゃおう推理オタクの彼が、如何にも言いそうなセリフが目の前から飛び出してきて落ちつかない。あり得ない妄想が頭の中に繰り広げられる。

戸惑った表情を見せる蘭に快斗はそっと片目をつぶって見せる。

「結構有名だぜ？毛利小五郎の娘で空手の都大会覇者、毛利蘭さん
と・・・」

我ながらわざとらしいと思いつつ、未だに自分を半分睨みつけているコナンに視線を移す。

「居候でキッドキラの江戸川コナン君？」

（いつも楽しませてくれる名探偵？）

心の中では一応の敬意を示しつつ、わざわざ“居候”とつける辺り完全にコナンで遊ぶ気満々である。

案の定、コナンの眉間にしわが寄る。

（るせー、好きで居候やってんじゃねーよ。）

突然コナンはなにか柔らかいものに顔を押しつけられていた。

「えー！！君が江戸川コナン君ー！？いつつもキッドを撃退してくれるあの男の子！？」

青子がコナンを抱きしめていた。

「えええ、あああの、ちっちゃっと、おおお姉さん・・・」

コナンの頬がパツと赤く染まる。

そりゃ、蘭よりは出るところ出ていないかもしれないが、女性特有の柔らかい体に抱きしめられて（それも不意打ちで）落ちつけという方が無理な話だ。

中身は至って普通の健全な男子高校生なのだから。

「おい、青子。蘭ちゃんほっといてそれはねーだろ。」

（さっさと離れろ、このニセガキ。）

突然、親しげに名前を呼ばれて蘭は驚いたようだった。コナンと青子は別の意味で目が点だ。

青子はコナンから離れて快斗を軽く睨んだ。

「ちょっと快斗！ “蘭ちゃん”なんて失礼だよ。大体、何でタメ口・・。」

そして、当然快斗の狙い通りにコナンの関心は“蘭ちゃん”発言に向く訳で。

これ以上馴れ馴れしくされては堪らない。慌てて会話に割り込んだ。

「お兄さんは確か蘭ねーちゃんと同じ年だったよね！」

（このヤロ・・・。）

幼馴染が絡むとこの上なく凶暴になる名探偵の怒りをこれ以上買うのは得策ではないので、快斗はとりあえず悪ふざけを止めた。

本当は知り過ぎるほど知っている2人組なので、初対面の振りをするのと思ったより難しい。

特に、この見た目は小学生の名探偵の前ではどうしてもボロが出そうになる。

快斗はちらりと青子に目をやった。

（慣れ切った状況とはいえな、どうにも遣りづらいんだよ・・・。こいつの前では。）

必要以上にふざけてしまったのはこの遣りづらさのためである。

「そ。彼女は帝丹高校の2年生。オレらと同じ17歳。だよね？」

屈託のない笑顔に飄々とした態度を見て、ようやく疑いから解放された蘭は笑顔で答えた。

「はい。毛利蘭です。さっきはごめんなさい・・・。えっと、黒羽

君と・・・」

「中森青子です！ホントに同年？てっきり大学生だと・・・。」

「・・・おめーがお子様なんだよ。」

快斗の不用意な一言がきっかけでまたしても二人は口喧嘩タイムに突入。

呆氣にとられるコナンと蘭は、奇しくも同じことを考えていた。

（私と新一も・・・）

（こんな感じに見えてんのか・・・？）

良く見れば似ていると言うほどでもないのだが、癖っ毛の新一と中学生の蘭が並んでいると言われれば領けなくもない。

そして、ようやく場が落ち着いたのはそれから10分後。

「青子ちゃんのお父さんって2課の中森警部なんだ。」

「うん。いつかぜーったいキッド捕まえるんだ。」

女性陣は意気投合したようである。すぐに自分のこと、学校のことなどを話し始めた。

コナンは無言で穴があくほど快斗を見つめ、快斗はそんな彼の視線に気づきながらスルーしていた。

探偵より一枚上手に出ているという優越感が堪らない。思わず緩みそうになる頬を必死で引き締めた。

「青子、何なら談話室でも行ってこいよ。」

しばらく二人の会話を聞き流していた快斗が口を開いた。

女の会話を聞かされるのも疲れるし、名探偵とも話したい。

蘭がコナンを見ているのに気がついてもうひと押し。

「ボウズはオレが見てるからさ。」

なっ？と覗きこまれて咄嗟にコナンは不機嫌な顔を隠せなかったが、蘭に対しては笑顔を向けた。

「うん。ボクは大人しくしてるからさ、蘭ねーちゃん行ってきなよ。」

┐
コナンはコナンで事件のことを聞いたかったので、丁度いいとばかりに快斗の後押しに乗った。
彼女たちは仲良く出て行ってしまう、あとに残された二人の間に微妙な空気が流れる。

さてさて、どうなることやら。

知らない探偵、知る怪盗

ちらちらとお互いの様子を窺いつつも絶対に目だけは合わせない。こう言えば緊張感に溢れた探偵と怪盗の心理戦が繰り広げられるように聞こえるかもしれないが、決してそう言う訳ではない。そもそも今の彼らは探偵と怪盗でさえない。

少々頭の切れすぎる小学生と事件に巻き込まれた高校生である。

(・・・んゝ、何か面白くなりそう♪)

快斗はのんきにこの状況を楽しんでいた。

(にしても、さっきのあいつの顔は見ものだったなゝ)

目を白黒させ、口をパクパクさせている名探偵の顔なんてそうそう拝めるものではない。

一方、コナンの思考回路はようやく通常運行に戻ってきていた。

自分の顔が目の前に現れた時は、一瞬、白い衣装と不敵な笑みが頭をよぎったが、すぐに思い直してブンブンと頭を振って怪盗の姿を頭から追い出した。

事情を知らない人間が見ていたら、完全に挙動不審だったであろう。(何で似てんだよっ。ついでにそのふざけた言動も気にいらねー。)

探偵がとてつもらないことで目の前の人物に敵意を燃やしているのは気のせいだろうか。

顔が似ているのは当人の責任ではない。それを利用するのは彼の責任だが。

ふざけた言動も、半分以上は性格なのだから仕方ないと言えば仕方ない。

しかしそれを冷静に判断できるほど、流石の名探偵も人間が出来て

いない。

見た目は子供、頭脳は大人といっても精神は一介の17歳である。

「んじゃま、改めて。オレ、黒羽快斗。よろしくな、ボウズ。」

突然話しかけられたコナンは急いで顔を上げた。

「あ、うん。ボク、江戸川コナン！今日は、おじさんの用事で来たの。」

なんとか営業用の良い子スマイルを浮かべる。捜査の第一段階は、相手に好印象を与えること。

もっとも、先程の騒ぎで散々敵意をむき出しにした後なので取ったつけた様な作り笑顔がバレバレである。

（こいつ、いつもこうやって誤魔化してんだな・・・。）

快斗にしてみれば、素のコナン、つまりは新一を知っているだけにどうもやりにくい。

さらに素顔で向かい合っていることを思えば快斗にとって非常にまずい事態のはずなのだ。

しかし、当の本人はと言えばそんなことはどこ吹く風。

（いーじゃん、いーじゃん♪ スリルあつて。）

・・・それでいいのか、現役怪盗。それでも確保不能の大怪盗か。いや、“だからこそ”なのかもしれない。

「それからね。おじさんが、いくつか聞き忘れたことがあるって。」

「なんだ？小さな探偵君？」

快斗の言葉を聞いたコナンはあれ、と首をかしげる。

（この感じ、知ってる・・・。）

今まで何人に同じような言葉をかけられただろう。ただ、今日に限って背筋が緊張するような、そんな感じを覚えた。目の前にいるのんきな怪我人からは想像もつかない気配がわずかながらに混じっている、ような気がする。彼には自分の探偵本能を刺激する何かがある・・・。さっき頭から追い出したはずの影が戻って来かけた。

「お兄さんさあ、どこかで僕と会った？」

「お前とはこれが初対面だけど？」

（おいおい、もう疑ってんのかよ……。）

「そっか、そうだよな。」

（そんなはずねーよな……。）

何でもない風に答えつつ、内心焦りまくりの快斗と子供らしく振舞いながら疑問だらけのコナン。

やはり相手は自分が名探偵と認めた男。下手な真似はできない。

快斗は改めてこの小さなライバルの力量を見直すのだった。

「お兄さん、あのバーで働いてたんだよね？何か気になることとかあった？」

そんな快斗の胸の内など露知らず、早速コナンは捜査を始める。

「えーっと、あのバーに絵がたくさん置いてあるのは知ってるな？あれの裏には暗号があって……。」

気になったので掃除がてらこっそり裏を見てみたのだと言う。

コナンが身を乗り出すようにして先を促すと、快斗はゆっくり思い出すように先を続けた。

「なーんか、いろいろあったぜ。ワープロ打ちのとか、手書きとか。あ、蔓草の押し花が貼ってあったのもあったな。」

小さな探偵が上げる疑問の声に快斗は丁寧に説明してやった。

「ああ。緑の葉と白い花。何かアケビに似てたな。」

何でこいつはそんなこと知ってるんだ、と心の中で突っ込みを入れてからコナンは話題を変えた。

「それで、犯人の名前かもしれないって言う暗号を毛利のおじさんはとりあえず平仮名には出来たんだけど、そこから先がまだ分からないんだって。その言葉は……」

言葉を続けようとするコナンの目の前に快斗が人差し指を立てて止

めた。

「すなお かれん おんじょう、だろ？」

小首を傾げてきょとん、とした邪気のない目で見返されて快斗は限界だった。

彼が本物の小学一年生であれば許容範囲のかわいらしい仕草なのが、生憎と快斗は残念な事実を知っている。―彼が自分を追いつめる数少ない高校生探偵であることを。

（もう無理だ……。さっきからこいつ面白すぎる！！）

「ぶっ……。はっはは、って……。ははは……。いってて。」

彼は盛大に吹き出した。腹の傷が痛むが笑いが止まらない、止められない。

ポーカーフェイスなんて欠片もない。

たっぷり3分間、快斗は笑い続けてコナンの冷たい視線に晒されることになる。

「……。で？」

快斗の笑いが一通り収まった時、コナンは絶対零度の声で尋ねた。彼にしてみれば、なぜ笑われているのか分からないため不愉快極まらない。

笑い過ぎて目元に浮かんだ涙を拭い、必死に笑いを押し殺そうとしながら快斗は答えた。

「ああ、悪い悪い。あの暗号は、文字をパソコンのキーボードに置き換えるんだ。Rなら“す”、uなら“な”、ってな。パソコンで打たれた文字ってのがヒントだな。」

快斗は身を預けていたベッドの背もたれから少しだけ体を乗り出した。

「そうだろ？ボウズ。」

またコナンの心の奥が刺激される。快斗が自分の本来の姿に似てい

ることによる単なる既視感か、それとも過去に出会ったことがあるのか、どちらなのか分からない。

「・・・す、すごいや。お兄さんも名探偵だね。」

（何だ、何なんだ、さっきから感じるこの感覚は・・・。）

慌てて子供の振りをしつつ、コナンは必死に記憶を探っていた。記憶力には自信がある方だが、記憶の扉は建てつけが悪いようになか開いてくれない。

（そんなに昔じゃないはずだ。むしろ、最近・・・。）

しかしそれも一瞬で過ぎ去った。彼の関心は何よりも目の前の事件に向いている。

「他に覚えてることは？」

快斗はしばらく考えていたが、悔しそうに顔を上げた。

「あん時はすぐに土手の方へ転がっちゃったし・・・悪い、今は思い出せない・・・。」

あの時、周りの風景や音が消えて視界には彼女しか映らなかった。必死になり過ぎた自分が情けない。

（いつ何時たりとも・・・か。）

コナンは大してがっかりしなかった。突然狙撃された人間に何か覚えていろうと言う方が無理な話だ。

ここで考えていても仕方ない。とりあえず話は聞けたし、今は少し頭の中を整理したかった。

「そっか、じゃ、また来るから何か思い出したら教えてね。」

そう言って病室を出ようとする彼を快斗は呼びとめた。

手にしているのは一枚の紙切れ。

「わざわざ江古田まで来るの大変だろ？これ、オレの連絡先。何かあったら連絡してくれよ。」

そっと片目をつぶって見せる快斗。その笑顔はまるで小さな悪戯っ子だ。

コナンは驚いていた。探偵気取りの小学生に協力しようなんて物好き、そうそういない。

少し躊躇ったが“江戸川コナン”の携帯の連絡先を書いて渡す。

「じゃ、お兄さん……」

「もうひとつ。」

快斗がコナンの言葉を遮った。

「^?」

「その・・・“お兄さん” ってのやめてくんねーか？ もうちよつと気安く呼んでほしいんだけど。」

少し照れくさそうに言う快斗。

（まあ、いろんな意味で、だけど。）

本當ならタメで最高のライバルである人間に改まって呼ばれるなんて居心地が悪い。

たつぷり3秒間、コナンは半目で快斗を見つめていたが、やがて明るい笑顔になって言った。

「・・・分かったよ!じゃあ、快斗にーちゃんって呼んでいい?」

完璧に甘えたような子供の演技をして見せるコナン。さすが伝説の女優の息子とでもいうべきか。

もつとも、その心中はかなり複雑だろう。

「おう！頼むぜ、コナン。」

（しまった、また“名探偵の見たくなかった子供の演技シリーズ”が増えちゃった・・・。

毎回毎回、どっかで見るもんなあ。お前も苦労してんのな……。

（ったく、こいついちいち気に障るっつか、気にいらねー．．．
けど、何か気になんだよなあ。）

心の中を隠すように必要以上にニコニコするコナンと快斗。若干恐ろしい図である。

ちようど良い具合に扉が開いて、蘭と青子が顔を出した。

「コナン君、帰るよ。黒羽君、騒がせちゃってごめんね。お大事に。」

「はーい。またねー快斗にーちゃん。」
「青子も帰るね。また明日来るから。」

コナンと蘭、青子が帰ったあと、快斗ははあ、と息をついた。流石に疲れた。

（事件の解決にはあいつの力が必要だ。まあ、“キッド”にとつちやリスクは高いけど・・・）

バレたらその時はその時だな、なんて考えている自分に快斗は苦笑して突っ込みを入れた。

（バレねーっつーの。）

探偵の前に素の自分を晒し続けるのは確かに居心地が良くはない。しかし、彼の中の“怪盗”はそんなスリルを自然と求めていた。

ふふ、と笑って目を閉じる。どうやら、しばらく退屈しないで済みそうだ。

そんなことを思いながら、静かに夢の世界へ意識を飛ばした

推理ショー？

探偵事務所では、恒例のイベントが開かれていた。

そう、毛利小五郎の推理ショーである。

ただし、“眠りの”はつかない。ぼっちり目を覚ましている。

これで読者の皆様はお分かりだろう。この回は読み飛ばしてくれても構わない。

お付き合い頂ける方だけ、次に進んでほしい。

「犯人は柳百花！これで間違いありません！」

小五郎は自信たっぷりの様子でデスクにもたれると決めゼリフを放った。

当然、目暮や高木からは疑問の声が上がる。

「しかしだね、毛利君。彼女には樫野氏の事件でアリバイがあるんだぞ？」

「ええ。しかし、宅配なんてほんの数分で済むことですからね。死亡推定時刻はあくまで“推定”であって必ずしもその時刻に殺された訳じゃありませんよ。」

小五郎の推理はこうだ。

彼女は宅配便を受け取ってすぐに樫野氏を殺害。その後店内で何かを探していた。

目当てのものが見つからないので、仕方なく立ち去ろうとしたが運悪く楠本に目撃される。

咄嗟にガラスを割って彼女を怯ませ、返り血を防ぐために着ていたパーカーを脱ぎ捨てて立ち去った。

そして何食わぬ顔で現場に現れたという訳だ。

さらに、小五郎は決定打だと言わんばかりにビツと人差し指を立てた。

「現場に落ちていた白い花ですよ、警部殿！彼女の名前は百花。“白花”、つまり白い花という文字が隠されているじゃありませんか。」

沈黙。目暮、高木、コナン、更には蘭までも開いた口が塞がらなかった。

「その“探していた何か”とは何なんだね。」

「現場に自分の名前を示すような真似をする犯人はいないと思いますけど……。」

「パーカーだけ脱ぎ捨てたんなら、サングラスと帽子は？」

「他の犯行はどうなるのよ。」

これだけ言われると無類のおめでたい自信家とて自信をなくす。

「いやっ……何を探していたかは分かりませんが……中には自分がやったって示したい犯人もいるんじゃないか？……サングラスと帽子はその辺に隠したか、野良犬かなんかが持って行ったんだろ……他の犯行は……あ、そもそも連続殺人じゃなくて別々に起きた3件の事件だったりして……。」

斜め上に視線を向けて、頭を掻く小五郎に4人は深いため息をついた。

目暮と高木は頭を抱えてしまっているし、我らが名探偵は半目で顔が引きつっている。蘭は父のザル推理ぶりに呆れているようだった。

「……高木君、帰るぞ。」

「……はい……。」

今の数十分で一日分の精神力を使い切ったような表情で二人は車に

乗り込んだ。

帰りの車内で目暮はもう一度ため息をついた。

あの男の無茶苦茶な推理はともかく、早くこの事件を解決しなければならぬ。

容疑者を全員拘束してしまえばこれから事件は起きないだろうが、証拠もないのにそれはできない。

「あの男も訳が分からんな。」

「ですね。」

独り言の呟きに隣でハンドルを握る高木が相槌を打つ。

一度眠れば推理は天下一品。両目を開けて動き回っている時は肝心なものが見えていないのに、座り込んで目を閉じた瞬間、鮮やかに事件の真相を導き出す。

「本当は霊能力者か何かなんですかねえ……。」

「……何をバカなことを言っとるんだね。」

即座に否定できなかったのは、それほど毛利小五郎と“眠りの小五郎”の推理がかけ離れているからだろう。

（まるで、誰かが彼の口を借りて謎を解いているような……。）

目暮の思考が禁断の領域まで差し掛かりかけた時、間の抜けた電子音が車内に響いた。

「あー、もしもし？」

『警部殿！先程は申し訳ありませんでした！』

「……今度は何だね？」

彼の声の不機嫌になってしまふのを責めることはできない。

『いえ、実は、詳しい犯行時刻をもう一度聞いておきたいと思いまして。』

「ん？ああ……1件目は君も聞いたと思うが死亡推定時刻は正午頃。2件目は22時10分頃。3件目は12時45分頃だ。」

『4人の通信手段は携帯とパソコンですよ？固定電話を持っているのは確か・・・』

「木元さんだけだ。あとは皆携帯で済ませてしまっている。」

『通信の履歴はあるんですね？』

目暮はファイルをめくって細かい数字を教えていった。

さっきとはえらい違いだと思いながらも小五郎の質問にきちんと答えてやる辺り、目暮は本当に人が好い。

『ありがとうございます。それでは、失礼します！』

通話が切れた携帯を眺めながらも一度目暮は呟いた。

「訳が分からんな。」

通話を切った携帯電話を手に彼は事務所へと向かった。

ドアを開けると事務所の主が弱りきった顔で背広やコートのポケットをひっくり返している。

「おい、コナン。俺の携帯知らねーか。」

「これでしょ？上のテーブルに置いてあったよ。」

コナンから受け取った携帯をそそくさしてしまう小五郎を横目に、彼は事務所の扉を閉めた。

（悪いな、おっちゃん。ちょっと借りたぜ。）

彼の胸元にはいつものように赤い蝶ネクタイがついている。

「さて、と・・・。」

ぐっと伸びをして彼はあるところへと向かった。

江戸川コナンではなく、工藤新一として事件をじっくり考えられる場所へ。

午後の阿笠邸

「で、まっすぐここに来たわけね・・・。」

彼は迷うことなく阿笠邸に向かっていた。そこなら正体を隠すために気を遣う必要もない。データも豊富。まさか工藤邸に行く訳にはいかないので、ここが推理にはうってつけというわけだ。

灰原がコーヒーを手渡しながら半目でコナンを見る。

（あなたはここが他人の家だということ忘れてないかしら？）
彼にしてみれば、ここが他人の家だという意識は全くないだろう。

「樫野さんの事件の時に木元さんが言ってた10年前の事件ってのも調べたかったしな。」

「何かあったの？」

コナンは古くて厚ぼったいファイルを取り出した。

「ああ、違法賭博・・・特にカジノポーカーとか、雀荘でのいかさまで金を巻き上げていたらしいな。つたく、何世紀の話だよ。」

「時代錯誤もいいところね。」

灰原は探偵にも事件にも興味はない。しかし、彼が生き生きと語りだすのを見ると無視してはおけなくなるのだ。彼女は自分でも気づかぬうちに、この推理オタクに完全に影響されていた。

勢いよくめくられるページがカサカサと音を立てる。

「結局、この殺された木村幸人^{きむら こうじん}って人は、結構売れてたマジシャンなんだけだな。借金のせいで、犯罪の片棒を担がされていたらしい。最後は、グループから抜けようとして殺されたってとこだな・・・
え？」

コナンは目を見開いた。当時のスクラップらしき切り抜きには見慣

れてしまった姿が映っていたからだ。

『月下の奇術師、犯罪グループに先んじて宝石GET！犯罪を暴く！？』

昨日5月4日 深夜、菱田財閥記念館において・・・』

（なんだ・・・？ キッドも同じ現場にいた・・・？）
さらに。

『話題の人気推理作家、事件を解決！』

取材に応じている引き締まった横顔は、まぎれもなく若き日の父、
工藤優作であった。

（父さん！？でも、確かこの日は・・・。）

記事を読み進めるうちに、驚きの事実が浮かび上がってきた。

木村幸人殺人事件が起きたのも、犯人グループの総検挙が可能になったのも、それはすべてキッドが犯行に及んだからだと言うのだ。
そしてそれを通報したのも、宝石を結局取り返したのも工藤優作。
キッドが狙った獲物を偶然ターゲットにしてしまった不幸な男と、
それによって暴かれた真相。

この二つを結びつけるものは何なのだろう。

すっかり探偵モードに入ったコナンを見て灰原は思う。

真実を追い求めることは間違っていない。しかし、必ず誰かを傷つける。

（工藤君・・・あなた、真実から目を背けたいと思ったことはないの・・・？すべての真実を見抜ける自分が、嫌になったことはないの？人が人を殺す理由なんて醜いじゃない。人が自分の弱さに負けた結果でしかないんだから。）

あんな闇の中に身を置いていたから、そして、こんなにも真実を求めようとする人が側にいるから、余計に真実を明るみにしてしまうのが怖いかもしれない。

組織の連中がやっているような単なる利益や口封じ目的の殺人なら、

それを暴いて罪を償わせればいい話だ。しかし、恨み、憎しみ、悲しみ、その他複雑な人間の感情が絡めばそうもいかない。

そんな時、探偵の言葉は何よりも強力な凶器に変わってしまう。

「そういえば新一。君にそっくりの被害者がおるんじゃない？」

阿笠に話しかけられたコナンはファイルから目を離して顔を上げる。

「ん？ あー、黒羽って奴のことか？ 俺も驚いたよ……。」

「なに？ 彼のこと、気になるの？」

灰原はコナンの口調が変わったことに気がついた。自信たっぷりの笑みが消えて歯切れが悪い。

それに、彼が事件の関係者をそんな風にぞんざいな呼び方をするのは珍しい。たとえ同年代でも一応の敬意をもって関係者には接するのが彼のやり方だったはずである。

「いや、そいつのこと、すごく良く知ってる気がしてさ……。」

「あら、名探偵さんにも解けない謎があったのね。」

心のどこかでほっとしたことを悟られぬよう、皮肉たっぷりの声で返す。

「おめーなあ……。」

半目になるコナン。こういう時の灰原は本当によく分からない。

そのまま視線を移動した彼は、灰原が手にしている本に気がついた。彼女がいつも読んでいる横文字の医学書やファッション雑誌ではなく、ポップでカラフルな表紙。タイトルは『楽しいガーデニング』。

「がーでにんぐ……？」

「……何よ。悪い？」

本の陰から覗く灰原の目が怖い。

「私にこんな可愛い本が似合わないとも言いたげね。」

「いや……ハハハ……。」

まさに凶星を指されてコナンの顔は不自然に笑ったまま固まる。

蘭を怒らせて鉄拳が飛んでくるのは予想できるが、灰原を怒らせると何が出てくるか分かったものではない。

彼女が本を置いてゆっくりと立ち上がる。

思わず半歩身を引いたコナンだが、彼女はカップを手にキッチンへ向かっただけだった。

「マジで心臓に悪い・・・。」

ほっとしながら何とはなしに灰原が置いて行った本を覗いてみた。

表紙から受ける印象とは裏腹に、中身は結構専門的だ。

日陰棚の項目にコナンは目を止めた。

ムベ（郁子）

アケビ科ムベ属の常緑つる性木本植物。

先程の快斗との会話を思い出した。

『ああ。緑の葉と白い花。何かアケビに似てたな。』

（そうか・・・。ムベの漢名で郁子さんを示してたんだな。）

つくづく面倒なことをしてくれる被害者である。

午後の阿笠邸（後書き）

活動報告にも書きましたが、ブログ始めました。

蒼海の雲↓<http://cipobav.blog.fc2.com/>

まだ整っていませんが、よろしければお立ち寄りください。

TEL

(ん・・・?)

何かを感じたコナンの思考を遮るようにポケットが震える。

妙な感覚を探ることに必死になっていた彼は相手も見ずに通話ボタンを押した。

上の空だったために、ついだるい声が飛び出してしまう。

「もしもし・・・」

『あんだよ、愛想ねーな。』

彼は聞こえてきた自分の地声に驚いて携帯を取り落としそうになった。

慌てて携帯を持ち直して耳を当てる。

「うわっ・・・くろ・・・快斗にーちゃん？」

(どのタイミングだよ、お前は！)

どうもこの事件、電話で推理を邪魔されている気がしてならない。

『あ、今ダメか？』

「う・・・ううん。大丈夫だよ。」

よっぽどダメだと言いたかったが、電話してくるからには何か思い出したのだろうと大人しく話を聞くことにした。

『何か思い出したら教えろって言ってたからよー。直接関係あるかは分かんねーんだけど。』

そう前置きして快斗は話し出した。

柳も言っていた店長が5月4日を休日にする理由は10年前にあるらしい。

たった今、コナンが調べていた10年前の事件で死亡した木村幸人と樫野直樹は実はかなり親しい間柄だったらしいのだ。快斗も昔、

1, 2回だが会ったことがある。

『といっても、オレは全く覚えてねーけど。』

樫野氏は、木村幸人が亡くなってから毎年彼の命日に墓参りをしていたのだった。

自分が何か行動を起こしていれば幸人君は泥沼にはまらないで済んだ、死なないで済んだと何度も口にしていたそうだ。

『親父と結構親しかったし、覚えてないとはいえ、オレも幸人さんには会ったことがある訳だし・・・そんなこともつついっぺろしちまったって感じだったな。』

「そうだったんだ・・・」

話を聞いていたコナンはふと気付いた疑問を口に出してみた。

「どうして、それを僕に教えてくれるの？」

『は？』

電話の向こうから頓狂な声が聞こえてくる。

「目暮警部には言った？」

妙な間があった。答えに迷っているようにも、言い方を考えているようにも取れた。

『教えてろって言ったのはお前だろ。』

「うん・・・だけど、僕子供だよ？毛利のおじさんに伝えるにしても、刑事さんたちに直接言った方が早いと思って。」

色々な点で不可解な奴だった。突然尋ねてきた小学生に連絡先を渡して協力すると言ってきたり、重要な手掛かりになりそうな事実を教えてきたりと少々おかしいと言われても仕方のない行動ばかり取っている。

いつもコナンはそれらを苦勞して聞き出している訳なのだが、いくら毛利小五郎の名前があるからといっても向こうからこれほど協力的なのは珍しいパターンだ。

『お前が名探偵だからだよ。』

「え？」

今度はコナンが聞き返す番だった。

同時に少し身構えた。さっき、前に会ったように感じたのはひょっとして組織絡みなのでは、と疑ったのだ。

そうでなくとも、自分の正体を知っているかのような発言をする人間は警戒しなければならない。

コナンの警戒を読みとったのか、彼は笑いを含みながら言った。

『名字が江戸川、名前がコナン。これで名探偵じゃなかったら乱歩やドイルに失礼じゃねーか。』

「あ・・・あははは。」

どうやら杞憂だったことにほっとしながら、呆れた笑い声を立てる。

『そうだ。オレ退屈だからさー、明日遊びに来てくんねー？』

のんきな声がスピーカーから聞こえてきて、コナンはソファアーに身を投げ出しながらぶっきらぼうに言った。

「絶対嫌だよ。」

彼といると無駄に疲れる。コナンが今朝の数十分で学んだことだった。

『まったく、相変わらずつまらねえガキだな・・・。』

「ほっと・・・いてよ。」

強烈なデジャブを感じ、思わず途切れかけた言葉を何とか繋いだ。記憶が何処かで繋がったような、脳に電流が走ったような感覚に捉われた。

少しがっかりしたような、しかし安心したような声が耳に入ってきた。

『んじゃ、また・・・』

逃がすな。

心の奥で、そんな声がした。

「行くよっ。」

考える前に言葉が飛び出していた。

「僕、明日快斗にーちゃんのところ行くから！」

『ん・・・ああ、サンキュ。また明日な。』

電話の向こうで彼は驚いていたことだろう。

通話終了ボタンを押して携帯を投げ出し、コナンは深々とクツションに身を沈めた。

自分でもどうかしているんじゃないかと思う。いつもならあんなこと絶対に言わない。

心の奥で聞こえた声にも困惑していた。

彼を捕らえなければならぬ理由とはなんなのだろう。考えても答えは出ない。

「なんで言っちゃったんだろうな・・・。」

「どうやらあなたのおつくりさんは、相当厄介なようね。」

何時の間にか戻ってきていた灰原が新しいコーヒーを静かにテーブルへ置いた。

灰原の目が探るように自分を見ているのに気づいてコナンはきょとんとして問いかけた。

「何だよ？」

彼女が躊躇ったように見えたのは気のせいだろうか。

「・・・なんでもないわ。」

読書に戻ってしまった彼女を横目に、彼は渋い顔でコーヒーを啜った。

灰原は本に目を落としたが、文字など目に入っていなかった。

先程彼が一瞬だけ見せた表情が気になって仕方がない。

それまでの微笑ましくも思えたやり取りを考えると、どう考えても異質なものだっただ。

（どうして、あんな顔を・・・。）

犯人を追いつめる、鋭い探偵の表情が彼女の思考を支配していた。

接近

そして次の日。江古田中央病院507号室の前でコナンは立ち尽くしていた。

ノックをしても返事がない。寝ているのかとも思ったが、後で文句を言われないように来た証拠だけは残していこうとそつと扉を開けた。

「快斗にーちゃ・・・ん？」

白いカーテンが微かに揺れて、柔らかい光が空っぽの病室に降り注いでいる。

掛け布団の中には着替えや鞆が押し込まれて人型の膨らみを作っていた。

（あいつ・・・！）

いくら見た目が元気でも、一応絶対安静の怪我人である。

1分後、自分でもなぜそうするのか分からなかったが、コナンは病院を飛び出していた。

快斗は駅前の時計塔の前にいた。別に深い理由があって抜け出したわけではない。ちよつとあの探偵君を焦らせてやろういう悪戯心だ。かといってあまり遠くに行く訳にはいかず、なんとなくここに辿りついたという訳だ。じっとしているとかえって具合が悪くなってくる性分だから、頬に突き刺さる寒風すらも気持ちがいい。

3日ぶりに起こした体が重い。ベンチに腰掛けて青い空を突く時計塔と広場で遊ぶ子供たちの姿を眺めた。

野良らしきブチ猫が一匹、快斗の前に座り込んで大欠伸をした。追いかかれるなどとは考えもしないのだろうか。のんきに後足で耳の

後ろなどを搔いている。全く警戒していない、ように見えるが、良く見れば体はいつでもダッシュできるように構えられている。快斗の出方を窺っているらしい。

快斗は苦笑した。あの短気な探偵君の目に、怪盗キッドはこの猫のように映っているのかもしれない。

余裕たっぷり、相手を完全になめた態度。しかしそれでいて、完璧な計算と経験と勘を元に常に気を抜かない強かさ。今回はえらい計算ミスをしてしまったが。

猫は快斗を“害なし”と判断したのか、緊張を解いて本格的にまったりし出した。

何とはなしにまったりする猫をしばらく見つめていたが、突然ブチ猫は身を翻して植え込みに飛び込んだ。

（おいおいおい・・・猫も逃げるってかあ？）

振り返らなくても分かるこの気配。夜に対峙している時よりも感情むき出しの殺気。

「っはあ、はあ、てめえ・・・快斗にーちゃん！」

（お前の殺気は・・・。）

そう呼ばれて半ば呆れながら振り向けば、息を切らせたコナンが怒ったような表情で立っている。

どうやら余計な心配をさせられたことに怒っているようだった。

「・・・なんのつもり？」

「んー、別に深い意味はねーよ。こんなに天気がいいのにじっとしてるなんてもったいねーだろ？」

そんなふざけた回答を許せるほど、寛容な遊び心のあるコナンではない。

思わず腕時計型麻醉銃に手が伸びる。

（抜け出す準備までしやがって。この場で今すぐ眠らせて病院送ってやろうか・・・。）

見れば、快斗は黒いジーンズに青いセーター、黒いキャップ、それにダウンジャケットを羽織っている。

当然ベルトは緩めてあるが傍目には入院患者に見えない。キャップを深めに被って顔を隠してしまえば見舞客の振りをして抜け出すのは簡単だろう。さらに、検診や見回りの時間も計算した上で見つからないように抜け出していた。

コナンに言わせれば、明らかな計画的犯行である。それが彼の十八番だとコナンは知る由もない。

さすがの快斗も小さな探偵が放つ、小学生らしからぬ気配に気づいた。

（まったく、ホントに遊び心が足んねー奴だな。それとも足りないのはカルシウムか？）

この場合はコナンで遊ぼうとして抜け出した快斗が全面的に悪いと思うがそれは置いておこう。

「ほらほら、怖い顔してるとモテねーぞ？」

彼の前に拳を突き出し、彼がそれを怪訝な顔で見つめたのを確認してからパツと開いた。

快斗の右手から飛び出したのは一羽の白いハトと色とりどりのリボンや紙吹雪。不意を突かれたコナンは思わず声を上げて飛びのいた。パチンと指を鳴らせば、途端にリボンと紙吹雪は煙になって消える。悪戯っぽく笑ってハトと戯れる快斗。コナンは無性に悔しくて仕方がない。

（全然分からなかった・・・。）

こんなに近くで見ているのに、トリックも全部分かっている初步的なものなのに、それを悟らせない見事なテクニク。本当にそんなものがあるとするば、まさに魔法のようだった。

「・・・快斗にーちゃん、本当に僕と前に会ったことない？」

快斗の隣に腰を下ろしながらコナンが切り出した。

「なんでそんなに気になるんだよ？」

彼の右手から鳩が空高く飛び立つ。舞い落ちる数枚の白い羽を不機嫌そうに受け止めてコナンは呟いた。

「・・・なんとなく。」

このもやもやに捉われている自分に腹が立っていた。

なぜこんなにも捉われているのだろう。絶対に、黒羽快斗という人物と自分には接点があるはずだ。

それも、浅からぬ縁が。無視してはいけない何かが。彼の本能はそれを突き止めろと言っている。

一瞬快斗の表情が硬くなったように思えた。

「お前、さ・・・」

言い淀む快斗の口元をコナンは食い入るように見つめる。

彼が突然纏ったシリアスな空氣に惹きつけられた。この、人を忽ちのうちに虜にする強い緊張感には覚えがある。記憶の扉がきしむ音がする。

ごく、と生唾を飲み込む音が自分の中に響く。

「若いうちから悩むと禿げるぞ。」

「・・・は？」

気がつけば目の前の男は悪戯っぽく笑っている。

無駄に期待させられた挙句に見当違いの返答をされたコナンはベンチから半分ずり落ちかけた。

（こいつ、こっちが真剣に言ってるっつーのに・・・。）

大阪のやかましい奴とはまた違った面倒臭さというか、鬱陶しさというか。

でも、嫌ではない。むしろ、面白ささえ感じている。新一の姿で快斗と出会っていたら意外と面白い、いや、良くも悪くも刺激的な毎日を送れるかもしれない、と柄にもなく考えてしまった。

彼といるとどうもペースを乱される。自分の2手3手先まで読まれ

ているような感覚に陥る。

認めるのは癪だが、先回りされる快感も少なからずある。

そんなコナンに快斗の声が降ってくる。彼の目は子供のように生き生きしていたが、同時に真剣な色を宿していた。

「何でもかんでも分かっちゃ、人生つまんねーだろ。」

（キッドの正体・・・こればかりは謎のままにしといてもらうぜ？）

コナンもほんの少しだけ“演技”を捨てた。

どういう訳だか、彼の前ではあまり子供を装う必要性を感じなかった。

服部平次が自分を工藤新一でいさせてくれるように、彼もまた、偽らざる自分を引き出してくれる力を持っているようだった。

「何でもかんでも分かんねーのは考えもんだぜ・・・。」

快斗はこの時、確実に名探偵工藤新一の影を見た。

しかしそれは一瞬のことで、次に現れたのはただのマセた小学生江戸川コナン。

「事件の真相、とかね。」

お互いの真意を探るように二人の視線がぶつかる。先に目を逸らしたのは意外にもコナンの方だった。

ベンチから飛び降りて快斗に向き直った。

「じゃ、帰ろうよ。まだ痛むんでしょ？」

思わぬ所をつかれて快斗が間抜けな声を出す。その弾みで余計な所に力が入ったのか、彼は僅かに顔をしかめてベンチに蹲る。いくら自業自得とはいえ、放っておくのも気が引けてコナンは再び彼の元に歩み寄った。

「大人しく寝てないからこうなるんだよ・・・。」

中身が高校生だと分かっている、小学生に呆れた様な口調で言わ

れるとやはりそれなりに傷つく。

負け惜しみのような感情も込めて軽くコナンを睨んだ。

「何で気づいたんだよ。」

簡単な推理だと言わんばかりにコナンは迷わず彼の左手を指した。最初に彼を見つけた時からその位置は不自然なほど全く動いていない。

「左手。ずっと傷口押さえたままだよ。」

ポーカーフェイスは完璧だったけどね、と子供らしく笑っているコナンだが、目が笑っていない。

（手のかかる野郎だぜ。）

やせ我慢がばれた快斗は小さく乾いた笑い声を上げることしかできなかった。

「この無茶体質に心配されるようじゃ終わりだな……。」

心の声のつもりが、すっかり口に出ていたらしい。怪訝な顔をしたコナンが快斗の顔を覗き込む。

ちょうど鐘が鳴ったのが幸이었다。

青い空を震わせるように、どこまでも澄んだ音色が響き渡る。

二人はどちらからともなく塔を見上げ、鐘の音に聞き入っていた。

（ここは、あいつとの大切な場所だけど……お前との出会いの場でもあるんだぜ、名探偵。）

（コノカネノネハワタセナイ、か……。あの時の泥棒って……。）

お互いにあの事件を思い出しているなんて、二人は知らない。

ふと目があつた気恥ずかしさに、二人して慌てて目をそらせるのだった。

走る少年

電車に揺られること数分でコナンは米花駅に降り立っていた。

賑やかな駅前の風景も、今の彼の目には入らない。

（いろんなところが引っかけたんだよ・・・。）

頭の中に浮かんでは消え、消えては浮かぶ矛盾。真に迫れそうで迫れない。

なぜか歯車が上手く噛み合わない。

それが事件のせいなのか、はたまた自分のせいなのか、彼は判断しかねていた。

「あー！コナン君だあ！」

振り返れば探偵団のメンバーが勢ぞろいしていた。

驚いたことに灰原までいる。

「コナンもアイス食いにきたのか？」

「アイス？この真冬にか？」

呆れたように首を傾げる彼の前に歩美、光彦、元太の3人は葉書くらしいの大きさの紙をぐいとばかりに突き付けた。

覗きこんでみると、駅前の人気アイスクリーム専門店が出している広告だった。

「これを持っていくと、全品半額なんですよ！」

「ね、コナン君も行こ！」

満面の笑みの歩美に右腕を取られたコナンは何とかやんわり断ろうとしたのだが、元太や光彦の嫉妬深い視線よりもっと鋭い視線を感じて振り返った。

灰原哀がそれはそれは美しい笑みを浮かべて立っている。

「抜け駆けはなしよ・・・江戸川君。」

「ハ、ハイ・・・。」

彼女の放つオーラに負けた彼は為す術もなく引きずられていくのだった。

広告のせいで、店内は混み合っていた。

扉を押し開け、中に入るとコナンの視界は真っ白になる。

（あー・・・メガネ曇っちゃった・・・。）

メガネを外してハンカチを取り出そうとした彼の手が止まる。

曇ったレンズをじっと見つめて微動だにしない。

そして箱にアイスを詰める店員の手元を見た瞬間、彼は人ごみを抜けて駆けだしていた。

（そうか・・・だから・・・だから・・・！）

走り去る彼に、探偵団の声は届かない。

灰原だけが、謎めいた微笑を浮かべて彼の後ろ姿を見送っていた。

血相を変えて走っていく少年に道行く人々は不思議な視線を投げかけるが、当の本人はそんなことに全く気付かない。寒風吹きすさぶ町を、頬を紅潮させて、ただひたすらに走り抜ける。

何かに取りつかれたかのように走り続けた彼も、行く手を塞ぐ野次馬と見慣れた白黒の車体、黄色いテープには流石に足を止めた。

見覚えのあるアパートだった。嫌な予感がして現場に近づいてみると、馴染みの顔が見えた。

向こうもコナンに気づいたようで、驚いたような顔をして近づいてきた。

「コナン君じゃないか。どうしたんだい、こんなところで。」

「うん、ちょっとね。・・・何かあったの?」

高木は少し迷ったようだったが、そつとコナンの耳に口を寄せた。

「実は・・・笹山さんが襲われたんだ。」

目を見開くコナンに彼は周りの様子を気にしながらも事件のことを教えてくれた。

発見者はアパートの大家。笹山の部屋は大家の部屋の真上にある。

30分程前に上の階で言い争う声と大きな物音が聞こえた後、急に静かになってしまったので、気になって様子を見に行ったらしい。すると、玄関の扉が開いていて中では頭から血を流した笹山が倒れていたという。

「・・・それで、笹山さんは？」

「すぐに病院に運んだけど、思ったより怪我は軽いんだ。だけど・・・妙なことがいくつかあってねえ。」

「妙なこと？」

コナンの目にフツと不思議な光が宿る。

高木は手帳を開いていくつかの点を上げて見せた。

声を荒げていたのは一方的に笹山だったこと。

彼の部屋から他人名義の通帳や権利証が出てきたこと。

彼が出かける服装だったこと。

「あと・・・一番妙なのは、彼の手に握られていたんだよ・・・毛利探偵事務所の住所を記したメモがね。」

彼は探偵事務所に赴こうとしていたのだろうか。

だとしたら何か知っているに違いないが、なぜ真っ直ぐ警察に行こうとしなかったのか。

「じゃ、僕は捜査に戻るから・・・って、あれ？」

コナンの姿はどこにもない。慌てて振り返った彼の目は、既にKEEP OUTラインをぐり抜けて駆けだしている少年の姿が映った。

「コ、コナン君！」

高木はあたふたと後を追った。

大人たちの足の間をすり抜けて現場に飛び込んだ彼はじっと辺りを見回した。

大分片づけられてはいるが、血痕や砕けた鉢植えはそのままだった。砕けていたのは例の鉢植え。

（殴られたのではなく、鉢植えに頭をぶつけたのか・・・？）

事故に見せかけた殺人はよくあることだが、殺人に見せかけた事故などあり得ない。

それに、彼は死なずに生きている。

もし、今回の犯人が笹山を殺そうとしていたなら、止めを刺してはいくはずだ。

キッチンのナイフや包丁はそのままだったから、凶器に困ることはない。

では、なぜ。

コナンの頭には既にひとつの答えが出来上がっていた。

突如体が持ち上げられる。

「ダメじゃないか、勝手に現場に入ったりして。」

「えへへ、ごめんなさい。」

困り切った顔の高木と呆れかえった顔の目暮を交互に見ながら彼は頭を掻いた。

そうしてふと真面目な表情になると、目暮を手招きした。

「そうだ、目暮警部。小五郎のおじさんに頼まれたんだけど・・・」

「

数十分後。彼は大通りを歩いていた。

警部に頼んでおいたから、犯人が事務所に連れてこられるのは時間の問題だろう。

あとは事務所ですいつものように眠りの小五郎をやればいいだけだ。

（ただ・・・なーんか不安なんだよな。）

言い知れぬ不安を抱えて事務所へ歩いていると、電気店のテレビから流れてきた単語に反応して足を止めた。

「大変です！怪盗キッドからの予告メールです！」

（何ッ）

顔を上げると、レポーターが興奮した様子で早口に話している。

「『今夜19時、過去に苛まれし自らの幻影を救うべく菱田美術館に参上する。』何がキッドの獲物なのか明記されていませんが、警察の発表によりますと、これは10年前にキッドが狙った“レインボー・ローズ”のことだと予想されるそうです。キッドが同じ宝石を2度狙うのは極めて珍しく・・・」

レポーターの解説を最後まで聞かずに彼は向かっていたのとは反対の方向にアスファルトを蹴っていた。

（19時って・・・あと1時間しかねえじゃねーか。）

いくら警察の仕事が早くても、1時間で確実に犯人を確保する保証はない。

コナンはあの場ですぐに犯人とキッドの関係に触れなかったことを悔いた。

知らなければ、おそらく警部たちがキッドの現場に向かうことはないだろう。

（あの野郎・・・なんてタイミングで・・・！）

彼の中にある仮説が立った。

もし彼もすべて知っているなら。

これが彼の用意したフィナーレの舞台だとしたら。

そして、あいつの性格を考えれば。

（お膳立てつつーことか・・・。）

滴り落ちる汗に構わず、彼はひたすら走り続けた。
小さな追跡者がいることも知らないで。

走る少年（後書き）

すみません。大事な一文が抜けていたので編集しました。

記憶の海

コナンが電車で揺られていたちょうどその頃。

江古田の黒羽家、とある一室。

「くっそー！見つからねー！！」

快斗は小さく叫び声を上げて大量のファイルの山の中に座り込んだ。あの後、せっかくの機会に快斗がおとなしく引き上げる訳もなく、病室に戻ったふりをして真っ直ぐここ―自宅の隠し部屋―にやってきた。

10年前、木村幸人はキッドの事件で亡くなったはずだ。

ならば、何か手掛かりがあるかもしれない。父が何か書き残したかもしれない。

膨大な量の犯行ファイルを調べていたのだが、なぜか10年前のファイルにそれらしきものは見当たらない。

焦る彼の目に一冊の本が映った。

「アルバム？」

ファイルに紛れていたそれはアルバムだった。

開くと父や幼い自分の顔が目飛び込んできた。

少し感傷に浸りながらページをめくっていた快斗の手が止まり、あの写真を凝視した。

5人の人間が笑っている。

右端にいるのは紛れもなく父、盗一で、ステージ衣装をしっかり着ている。

その隣は檜野で、一番左端の若い男が木村だろう。

盗一が肩に手を置いている少年は快斗自身だが、その隣にいるのは・

・・・

深い記憶の海に沈んでいた映像が呼び覚まされる。

さらに、その写真の裏に数枚の切り抜き記事が隠してあった。

『月下の奇術師、犯罪グループに先んじて宝石GET！犯罪を暴く！？』

昨日5月4日 深夜、菱田財閥記念館において・・・』

『話題の人気推理作家、事件を解決！』

『今年のベストセラーは『闇の男爵』 工藤優作著
記念パーティーは・・・』

快斗はゆつくりと3枚の記事を見比べた。

よく注意して観察すれば、ばらばらの出来事がたちまち一本の線になる。

自分の周りで起きた過去を知るにつれ、やるせない気持ちが湧き上がってくる。

耳に入れたイヤホンが、彼が動きだしたことを伝えてきた。

相棒^{ハト}に探偵をこっそりつけさせていたのだ。

迅速な行動で警察権力を使いこなす彼のことだ。すぐにあの人は捕まってしまうだろう。

快斗は立ちあがった。最初の記事にチラリと目をやってからパソコンに手を伸ばす。

少しばかり反則だが、時間がない。一刻も早く知らせる必要がある。

あの人が乗ってくる確証はないが、可能性は高い。

もう後戻りできない所まで、追い詰められているはずだ。

人間誰しも、追い詰められた状態では判断力が鈍る。そこに賭けるしかない。

自分がバカなことをしようとしているのは分かっている。

こんなことをしなくても、あの名探偵に任せておけば事件は解決す

る。

それでも彼は無理にでも関わってやろうと心に決めていた。

「怪盗がはじまりなら・・・」

快斗は低く呟いた。

素早く宛先と本文を確認し、送信ボタンをクリックする。

「終わりの怪盗でなくちな。」

しばらくファイルの山を見つめていたが、やがて3枚の記事を手にとってポケットにねじ込んだ。

ふーっと息をついて隠し部屋のパネルを押し開ける。

太陽はだいぶ傾き、仕事まで間がないことを告げていた。

「そうだろ・・・親父。」

彼が仕事前に足を運ぶ場所といったら、決まっている。

たちまち彼の姿は人込みの中に消えた。

若鳥への思い

軽いベルの音を耳にして、彼は反射的に戸口へ笑顔を向けた。

次の瞬間、手にしていたグラスが揺れて重力に従って落ちて行く。

しかし客は顔色一つ変えずにそれを間一髪で受け止めると、ことりとも音を立てずに彼の前に置いた。

「ったく、危ないだろ。気をつけろよ。」

その言葉も耳に入らないかのようにカウンターの中の彼はただ口をパクパクと動かしているだけだった。

他の客がいなかったのが幸いだった。

彼の口からはとても意味を為すとは思えない単語が切れ切れに飛び出す。

「か、か、かい、ぼっ、ぼっちゃ・・・」

「あ？ かぼちゃがどうしたって？」

真顔でしらじらしい突っ込みをする客に、彼の思考回路は復活したようだった。

唾を飲み込んで発した言葉には、驚きと困惑と心配が入り混ざっていた。

「かい・・・快斗坊ちゃま！」

「よっ、寺井ちゃん。」

手近な椅子に腰掛けていつもと変わらぬ笑顔を見せる快斗に寺井はますます混乱させられた。

昨日見舞いに行った時は確かに入院していた怪我人が突然現れれば、彼でなくとも混乱するだろう。

ただ、彼も伊達に世界を騒がす怪盗の仲間をやってきた訳ではない。この無茶しがちな2代目が仕出かしそうなことは分かる。というよ

り、それ以外に考えられない。

「・・・抜け出してきたのですか？」

「ビーンゴ。」

他人を思い切り脱力させるようなセリフと笑顔が少年から飛び出す。額に手を当てて盛大なため息をつく寺井を見ながら快斗は言葉を継いだ。

「でも、ただ抜け出してきた訳じゃない。」

彼の言葉に答えるように、小さくかかっていたラジオから興奮した声が響いてきた。

『大変です！怪盗キッドからの予告メールです！』

息をのんだ寺井に追い打ちをかけるかのように報道は続く。

『『今夜19時、過去に苛まれし自らの幻影を救うべく菱田財閥記念館に参上する。』何がキッドの獲物なのか明記されていませんが警察の発表によりますと、これは10年前にキッドが狙った・・・』手を伸ばしてラジオのスイッチを切った快斗はポケットから例の切り抜きを取り出して寺井の前に並べ、真っ直ぐ彼の目を見つめた。

「時間がねーから簡単に言うぜ。手伝って欲しい。」

寺井は答えない。目の前に並べられた切り抜きを食い入るように見つめている。

10年前のこの事件。当然寺井も知っているはずだ。

あれだけ几帳面に犯行記録を残していた父が、この一件をファイルに入れていなかった理由を。

「・・・親父の心残りなんだろう。怪盗としても、マジシャンとしても。」

快斗の静かだが強い声に、寺井は微かに頷いて優しい瞳で彼の目を見つめ返した。

鋭く切り込んでくる光はないが、不思議な力があつた。

「どうするおつもりですか。」

いつものように制止するでもなく、心配するでもなく、ただ問うてくる彼の胸の内は読みにくかった。それでも快斗は迷わずに答えた。

「終わらせる。」

父親が残した事件は必ず、2代目である自分が片づけて見せる。

あの小説家の息子である名探偵と共に。

寺井はしばらく彼の顔を見つめていた。いや、彼の中にある思いを見つめていた。

そして、自分の中にある思いを見つめ返す。

「・・・分かりました。」

素早く立ちあがった彼は、店の扉へと向かう。

札をくると裏返してCLOSEにした後、かつての主人に思いを馳せた。

寺井にとっては想像以上に、盗一にとっては想像通りに、受け継がれた翼は大きく成長しているのか、はたまた、世慣れぬ子供なのか。彼はまだ、飛ぶのにもっとも都合のよい風を選ぶ旅慣れた渡り鳥ではなく、力に任せてすべての風を受け続けようとする若鳥と言った方がいい。

ただ、方法は良いと言えなくとも、方向は間違っていない。

方向さえ間違えなければ、いつか目的の地へ辿りつく。

これでいい。

彼の顔に一瞬よぎった影に気づかないふりをして、寺井はいそいそと準備を始める。

快斗の姿は既がない。

犯行予告時間まで、あと50分ジャスト。

秒針は止まることなく動き続ける。

幕開け

菱田財閥記念館。

近代的なビル群に溶け込む外観は、サーチライトに照らされて銀色に輝いている。

10年間忘れたことのない、忘れられない場所だ。

だから、無意識にこの建物をモデルにあの絵を描いてしまったのかもしれない。

樫野直樹が自分に気がついたのはきつとその時だろう。

あの夜と同様に、怪盗の予告状のせいであたりは警官だらけだ。

その人は拳を握りしめた。それでも行かなくてはならない。彼がいるから行かなくてはならない。

もう自分には進むことしかできない。退くは地獄、進むも地獄だ。

ふと見れば、荷物の搬入口らしき裏口には誰もいない。この機を逃したら、絶対に中には入れないだろう。

足音を忍ばせて中に入り、荷物用エレベータに滑り込む。

心臓がバクバクと暴れている。上手くいきすぎて、逆に緊張しているようだ。

屋上へのドアに手を掛ける。鍵が掛っているはずのそれは、音もなく静かに開いた。

ここに来て、初めておかしいと思いつながらもドアを押し開けて暗い屋上に足を踏み出した。

強い風に体が押される。誰もいない空間を風だけが通り過ぎて行く。当然だ。19時にはまだ間がある。

コートの内ポケットに入れた物にそっと触れて少し肩の力を抜いた

時、背後で扉のしまる音がした。

驚きで変になりそうなくらい暴走している心臓を抱えて振り向いたその人の目に映ったのは、想像していた怪盗ではなくて見覚えのある子供だった。

なぜ、という疑問は不思議と浮かんでこない。

姿は少年でも、その瞳は鋭くて深かったからだろう。

いつも真実を見つめてきたその光からもはや逃れることはできない。彼はゆっくりと口を開く。その口元から目を離せなかった。

「事件の発端は10年前・・・」

少年の静かだが張りのある声が語るのは哀しい真実の物語。

「木村幸人きむら こうじんさんが殺害されたことからだ。彼の両親は幼少期に病死していたが、彼には年の離れた妹がいた。当時16歳。幸人さんを失った彼女は、親戚の楠本という家に引き取られた。」

その人はゆっくりと顔を上げる。その瞳には何も映っていない。

「そうだよね？楠本・・・いや、木村茉莉さん。」

否定も肯定もせず、彼女は黙ってそこに立っていた。

ここに現れた時点で、シラを切り通すのは無理だ。

それを分かった上での行動なのか。しばらくして彼女が口を開く。

「君は・・・？」

「江戸川コナン。探偵さ。」

ふっ、と茉莉が突然微笑んだ。

探偵に追い詰められた犯罪者には似合わない、柔らかな笑みだった。強いて言うなら、何かに安心したような穏やかな顔だったのだ。

（何を・・・考えているんだ？）

狂気に満ちた笑みや、自信に満ちた傲慢な笑みとなら何度も対峙し

たことがある。

今までにない状況に、流石の探偵も気味が悪くなった。

「じゃあ・・・聞かせて。私の犯行劇を。」

静かな声で問いかけてくる。その落ち着きが、空恐ろしい。

姿の見えない恐怖を押し殺して、彼は推理だけに集中しようとした。

小さな咳払いをひとつして、いつものペースを取り戻す。

「樫野さんが殺害された事件は全くセオリー通りだったよ。“第一発見者を疑え”って。」

言葉を切って反応を見る。前髪の影になって彼女の表情は読み取れない。

「変ね。私は樫野さんが殺された正午頃、笹山さんと会っていたのよ。無理だわ。」

「そんなのアリバイでもなんでもねーよ。」

彼の目が初めて真っ直ぐに彼女の目とぶつかった。

さあ、すべての謎を解き明かす最終幕の幕開けだ。

「樫野さんはまだ殺されていなかったんだから。」

謎解き

一見入り組んでいるようにも見えるこの犯行の核は、単純な死亡推定時刻の誤魔化しだった。

「あなたは午後1時半頃に店に出向き、榎野さんを殺害。自らのアリバイをつくるために偽装工作をした。

彼の体の周りに冷蔵庫から持ち出したドライアイスと並べ、倉庫にあった毛布を掛ける。エアコンを切り、自分は裏口から人目につかないように抜け出して、書店に行つてわざと珍しい本を注文したんだ。店員の記憶に残るように。」

ドライアイスは昇華してしまうため、水の痕が残ることもない。

後は、4時少し前に店に行き、毛布を回収して、外れやすくしておいたガラスを押し割る。

悲鳴を上げれば“第一発見者、楠本茉莉”の出来上がりだ。

「犯行があの日だったのはたまたまじゃない。寒い冬の日エアコンがついていなかった不自然さを隠すために、ガラスを割って、強い風が室内に流れ込む必要があったんだ。」

砕けたコーヒークップは、榎野氏が飲んでいたものだ。

わざわざ寒い部屋でコーヒーを飲んでいるのは不自然だ。

普通は、真っ先に暖房を入れようとするのではないだろうか。

「でもそれだけじゃ、」

「ガラスの曇りだよ。」

だんだんと茉莉の顔から余裕がなくなっていく。反対に探偵の声は力を帯びてくる。

「加湿器のタンクが空っぽだった。室内の湿度は十分だった証拠だよ。気温20℃の露点は9・6℃。あの日の気温差なら、ガラスに曇りが発生してもおかしくない。それなのに、ガラスにそんな形跡はなかった。」

探偵が一步前に出た。茉莉の足が自然と一步下がる。

「さらに、おかしいと思ったのはあなたの鞆の位置。店に来てからすぐ襲われたと言っていた割に、荷物は奥のテーブルの上にあった。少なくとも、あなたが嘘をついていることは分かる。」

ちなみに、黒いパーカーの袖口に張り付いていたビニール片は、パーカーを脱ぎやすくする工夫の跡だ。

不気味なほどの静けさが辺りを包む。警察ヘリのサーチライトが二人の脇を丸く照らし出す。

しかし、その輪の中に彼らの姿が浮かび上がることはなかった。

「次に怪盗キッドを狙った第2の事件・・・」

探偵の謎解きは続く。

「あそこで散弾銃を使った理由は2つ。1つは、キッドに接近するのはほとんど不可能だと思われたから。そりゃそうだ。何ていったって奴は日本警察がその威信にかけて追っても捕まらない天才的犯罪者だ。向こうから出向いてくるのでもない限り、一般人が出会うのは不可能だ。」

彼は華麗に標的だけを手に入れて消えて行く。窃盗は犯罪であるのに、彼の手にかかれば鮮やかなショーに変わる。はつきり言って、意味不明の大犯罪者。

だから、追う。探偵と怪盗の粋さえも超えて、一人の人間として彼の真実を追い求めたい。

そして、彼の真実はすぐ隣にある。

「もうひとつの理由は笹山さんに疑いの目を向けさせ、捜査を混乱させること。もちろん、彼も同意したうえでの工作。彼は共犯者だったんだ。」

今時、パソコンなんて持ち運べるほど薄くて軽いものがほとんどだ。犯行のため外出していたとしても、メールを返すことは容易い。はつきり言って、この犯行だけなら誰にでもできる。

探偵は言葉を切って目の前の女性を見つめる。反論があるかと思っただ、俯いた顔から表情は読み取れない。

「さらに、黒羽快斗を襲った第3の事件。動機は推測の域を出ねーが、奴に何か都合の悪いことでも知られたんだろう。仕事の中で彼の通学ルートや自宅を聞き出して待ち伏せた。ここでは笹山さんが手を下すことになった。あなたの腕ではとても人を撃つなんて無理だった。キッドの件と併せて考えれば、二人のスナイパーが同一人物でないことは一目瞭然だ。」

快斗が襲われる理由が彼にはどうしても分からなかった。暗号の件も考えてみたが、それは大して重要ではないように思われるのだ。

「それに笹山さんは言っていたんだ。『彼はどのくらいで退院できますか。』って・・・。」

茉莉はそれがどうしたと言わんばかりだったが、何かに気づいたらしくはっとしたようだった。

「そう。報道では『怪我をした。』としか言っていない。入院したと知っているのは、一部の警察関係者と家族、一緒にいた彼女、そして奴に銃弾を撃ち込んだ張本人だけってことだ。」

笹山の家固定電話はない。柳の電話は犯行現場の近くで受けたに

違いない。

フードを被って、その下から携帯電話を耳に当て、さらに上から手で押さえれば屋外だということは誤魔化せる。

「そして先程起こった第4の事件。あなたに殺意はなかった・・・。」

茉莉の眉がピクリと動く。

「犯行のことで言い争ううちに、思わぬことで笹山さんが転倒して鉢植えに後頭部をぶつけてしまったんだ。あなたは慌てて逃げた・・・。たったそれだけのことだったんだ。」

他人の通帳や権利証は茉莉が笹山を操る道具として用意していたものだ。

笹山が小五郎の所に行こうとしていたのは、金でもみつぶしを依頼しようとしたのだろう。

バカな男だ、と探偵は思う。

確かに毛利小五郎という男は推理に関しては二流、三流かもしれない。

しかし、罪を許さず、悔い改めさせようとする正義感は一流だ。

どんな脅迫があろうとそれを容易く了承するような骨抜きではない。

「ちなみに、これは僕の想像だけど、もしかして笹山さんの最初の彼女はあなただったんじゃない？ H&Mと彫られた古い写真立て・・・浩史と茉莉・・・過去の関係を利用して彼に近づき、犯行を手伝わせたんだ。」

探偵の物語が終わった。彼女は震える声を抑えつけて努めて冷静に問うた。

「証拠は？」

少年はふっと俯いて、ゆっくり呟くように言った。

「・・・ダイイングメッセージ。」

暗がりです、彼女の顔がこわばったように見えた。

「榎野さんが残した、絵の裏の暗号。あれを解くと、すなお、かれん、おんじよう・・・つまり、素直、可憐、温情になる。これは、ジャスミンの花言葉。そして、ジャスミンの漢名は・・・」

観念したように彼女は息を吐きだした。

「茉莉花^{まつりか}」

正面から、真っ直ぐに探偵の慧眼が彼女を射抜く。

「茉莉さん。あなたを示しているんだ。」

謎解き（後書き）

是非とも、アドバイスお願いします。

自分で張った伏線を回収しきれなくなった感が否めません・・・。

独白

重苦しい沈黙が二人を包んでいた。

激昂するでもなく、崩れ落ちるでもなく、ただ立ちつくす彼女に危険な空気を感じながらも、探偵は行動を起こせずにいた。

階下の騒ぎが一層大きくなった。

怒鳴り声、走り回る音、ヘリの音。それはすべて潮が引くように遠くなっていく。

「見事ね、探偵さん。」

ようやく、茉莉が口を開いた。

「樫野は兄の大学の先輩。入っていた劇団が潰れ、悪い奴らに取りこまれて借金が嵩んでいた兄を、事情を知りながら見捨てたのよ。警察にも弁護士にも相談せずに。仕事だって兄のプライドをズタズタにした上に門前払い。兄さんが死んだのはあの男のせい……。あんな罪滅ぼしされたって、兄さんは帰ってこないのに……。」

淡々と呟くように彼女は思いを吐き出す。

探偵はそんな彼女を静かに見つめていたが、その拳は固く握りしめられていた。

理解できない、したくもない殺人の理由。

「黒羽君は、彼を見てるとつらかったのよ。才能を認められなかった……それによって追い詰められた兄とは対照的に、父親は有名で才能豊かで認められて悩みなんてないってくらい楽しそうな彼。もうこの世にいない彼の父親も、樫野と同じように兄を見捨てた。結構親しかったのよ？でも、兄は所詮しがたい若手。彼の助けなん

て期待もできなかった……。だから誰かに、いえ彼に味合わせてやりたかったのよ。才能が若くして潰れる悔しさを……。絶望を……。」

探偵は内側から膨れ上がる感情を必死に抑えて、問いかけた。答えなど返ってくるはずもないことは知っていた。きっと、彼女は自分でも分かっていないだろうから。

「それで……。それであんたは満たされたのかよ。」
やはり彼女は答えない。

しかし、たとえ殺人を犯しても遂げていい目的などこの世界にあるはずはない。

「満たされたなら、私の誘いなどには乗りませんよね。」

探偵の背後から声が響いた。

先程まで感じなかった強烈な気配を背中に感じる。

振り返らずとも彼だと分かる。

白い衣が風に舞う。

いつものように、彼はどこからともなく現れた。

彼女の手にも光った凶器にも顔色一つ変えず、両手はポケットに突っこまれたままだ。

行動を起こしかけた探偵を目で制し、ゆっくりと彼女に向かって歩を進める。

一人の女性の心を取り戻すために。

真実をこの手に掴み取るために。

過去に苛まれし自らの幻影を、今は亡き父の思いを救うために。

過去

暗い銃口の前で、彼はいつになく落ちついていた。

それを構えているのが殺気だった殺し屋ではなくて、どこか怯えた目をした女性だったからではない。

とにかく落ちついていた。

彼女と探偵の間に入る。距離は10mもない。

いくら素人だろうと引き金を引けば一発くらい当たるだろうという距離だ。

彼女にその気がなくても、いつその震えた手が誤操作をしてしまうか分からない。

深く息を吸ってから、彼は語り始めた。

まるで魔法にかかったかのように、誰一人として動くものはいない。

「私は、10年前にある資産家が所有する宝石を標的にした。しかし・・・思わぬライバルがいたんです。」

怪盗は、いや、快斗は話しながら10年前に思いを馳せていた。父、盗一がキッドとして何を考えていたのか。永遠に分かることのない謎の答えを探っていた。

「明らかな素人強盗が侵入していました。私は先手を打っていち早く宝石を手に入れた。彼は腰を抜かしていましたよ・・・窓から飛び降りた時、背後から銃声が聞こえた。私は、引き返しても無駄なことを知ったんです。手遅れだった。」

茉莉はきつく唇を噛んでいた。誰も教えてくれなかった兄の最期。それを一方的に恨んできた相手から知らされるとは、なんと皮肉なことだろう。

「言い訳をするつもりはありません。ただ、あなたは受け入れなければいけない。あなたのお兄さんが犯した過ちを。そして、自分がやってしまったことを。」

彼はシルクハットの影から茉莉をじっと見つめる。

そのまっすぐな瞳に気圧されたのか茉莉は銃を下ろし、しばらく黙っていた。

ややあつて、絞りだされた声は震えてはいなかったがとても低かった。

「ねえ、涙が枯れるまで泣いたことってある？」

突然の発言に探偵と怪盗は思わず顔を見合わせた。

二人の困惑に構わず、茉莉は独り言のように先を続けた。

「あの時、私はもう16。その気になれば一人立ちできる年齢だった。けれど、そんな気力もなかった。

だから心配した親戚が引き取ってくれて、ひと月以上毎晩声を殺して泣いてたの。涙も出なくなった時、どうなると思う？」

探偵は答えられなかった。離れていたとはいえ両親は健在だし、この世で一番愛しい人はいつも側にいる。それを失うなんて考えたこともないし、考えたくなかった。

だから余計に、自分の隣から声がしたことに驚いた。

「憎しみという負の感情で心を満たすか、希望という正の感情をもつて生きるか……」

今までに聞いたことない程低く、呟くような声。

彼の知らない白き怪盗。

気障で、子供っぽくて、実はちょっと間抜けな一面もある天才的犯罪者ではなく、どこかに深い悲しみを背負った一人の男。

「空っぽのまま潰れるか。」

彼の心にはどす黒いものがゆっくりと、しかし確実に広がっていた。あの頃は事故だと信じ切っていたから、誰も憎めなかった。

周りにたくさん笑顔があったから、隣に最高の笑顔があったから、空っぽにはならなかった。

父と自分を繋ぐマジックがあったから、前を向いて進んできた。

（彼女は・・・。）

いけない、と気を引き締める。今の自分は怪盗キッド。快斗の心は押し込めなければならない。

こんなグラグラの自分では、いつ何時隣の鋭い目を持つ探偵に不意打ちを食らうか分からない。

怪盗の中のそんな葛藤など露知らず、茉莉は話し続けていた。

「兄を見捨てた檜野とキッドが許せなかった。誰かに兄の無念を味あわせたかった。でもね、それだけで終わる気は始めっからない。本当に憎んでいるのは・・・木村茉莉であり、楠本茉莉なのよ。」茉莉の声が途切れた。握りしめた銃をそっと目の高さまで持ち上げる。

たった一人、なぜ自分だけがこの世に醜態をさらし続けているのか。こんなもの、消えてしまえばいい。

不気味に光る黒い銃身に却って安心を覚えた。

楽になれる。この世からいなくなれる。兄に、父に、母に会える。

刹那、鋭い音がしてそれは宙を舞っていた。金属がコンクリの床を滑る鈍い音がする。

怪盗はトランプ銃を構え、探偵は先程まで彼女の手にあったものを踏みつけていた。

二人は静かに、しかし確実に怒りを燃やしていた。探偵がゆっくり口を開く。

「また罪を重ねるのか。」

もはや、彼に子供という代名詞は似合わない。低く、落ち着いた声は明らかに小学生を超越していた。

怯えと戸惑いの表情が彼女の顔に浮かんだように見えた。

そのまま、彼女はくると向きを変えて屋上を走り出した。

もともと侵入が禁止されている高い屋上だ。柵などないに等しい。

探偵が走り出すより早く、白い影が飛び出していた。

茉莉の靴が床を蹴る。

怪盗の手が伸びる。

探偵が走る。

風が、凧いだ。

懺悔

彼女の体はゆらゆらと宙に浮いていた。

街の灯りが小さく、遥か下の方に見えた。風が体を揺らす。

恐る恐る視線を上げれば、白い手袋にしっかりと掴まれた自分の右手が見えた。

「なんっ・・・で・・・。」

心に膨らんだのは、死への恐怖。

これから待ち受けているであろう、つらい償いの日々よりも恐ろしい死。

心臓を鷲掴みにされたような気がした。体中の血が冷えたように感じる。

体が引き上げられる。

少し迷ってからビルの縁へと伸ばした左手を取ったのは、小さな手だった。

「たとえ自分の命でも、それを絶とうとすることは立派な犯罪なんだよ。」

少年の口から発せられた重い言葉。深い瞳に体が射抜かれるようなしびれを感じる。

彼の目に、今度こそはつきりと怒りが揺らめいた。

憎しみのような冷たく鋭い怒りではなく、彼女が感じたことのない、暖かい怒り。

「許さねえよ。それだけはな。」

握りしめられる手が痛い。それでも、両手に感じる暖かさが確かに

生きていることの証しだった。

大きくてしなやかな手と、小さくて柔らかい子供の手。

しかし、そこから感じる意思の力は同じくらい強い。

固い地面に足をつけた瞬間、生温かいものが頬を流れた。後から後から、とめどなく溢れだしてくる。

へなへなと茉莉は彼らの前に座り込んだ。

胸の奥に、久しく感じていなかった感情が膨れ上がってきた。

ひとつ、またひとつとコンクリートの床に小さな点が現れては消えて行く。

「涙、残ってるじゃねーか。」

低く、呟くような声はなぜだか彼女の胸を打った。

一瞬たりとも逸らされない瞳は静かに彼女に向けられていたが、そこにあったのは怒りでも哀しみでも無い。

顔を上げた茉莉と怪盗の目がぶつかる。

彼女の唇から思わず言葉が漏れた。

「ずるい・・・」

（どうして、そんな瞳をしているの・・・？）

きれいとか、美しいとか、そんな言葉では表せなかった。

とにかく、彼の瞳は犯罪者のそれではない。

人を殺すということ。それは人を人でなくしてしまうこと。

だから怪盗キッドは人を傷つけられない。なぜなら、彼も人だから。

彼が誰かの命を―たとえそれが正当防衛であったとしても―奪ってしまったら、彼は彼でいられなくなる。“黒羽快斗”でいられなくなる。

分らないくらい小さなため息を一つ漏らして、彼は怪盗として応える。

「そう、私はずるい。ただの臆病な泥棒ですよ・・・。」

（今でも、怖くて仕方ねーんだよ。）

怪盗の名を呼び、歓声を上げる群衆の前で、大がかりなマジックショーを繰り広げるのは確かに楽しい。

警部や探偵たちが悔しそうな顔をすればちよつと気分がいい。

けれど。

建物に侵入する時、セキュリティシステムをハッキング突破する時、警部から逃げる時、いつも心のどこかに『もし捕まったら・・・』という恐怖がある。探偵と対峙する時、罪を犯している罪悪感がどこかにある。闇の世界に生きる者の宿命。

これだけは、慣れてはいけない感覚なのだ。

「あなたは、誰かに止めて欲しかったんだ。」

探偵が彼に似合わず俯きがちにこちらを見つめる。

その目に、先程まで燃えていた怒りはない。

「現場に落としたジャスミンの花はミスリードの意味もあったかもしれない。けれど、本当は・・・自分でも気付かないうちに“犯人は自分だ”って言いたかったんだ。そして、誰かに止めて欲しかったんだよ。」

茉莉はゆっくりと怪盗から目を逸らし、彼へと向けた。

自分でも認められなかった自分自身の心の叫びを気づかせてくれた小さな探偵は、何かやり切れないような、そんな表情をしていた。

「それに、櫛野さんが言ったことはお兄さんのプライドを傷つけた訳じゃありませんよ。」

彼女の口から微かに声が漏れる。

怪盗が流れるように手を振った。その動きに茉莉も探偵も引き付けられる。その手に現れたのは、大粒の宝石、レインボー・ローズ。軽くそれを放りあげると宝石は粉々に砕けて、二人の上に降り注ぐ。

思わず抗議の声を上げた探偵を無視して、彼は言葉を失っている茉莉に微笑みかける。

芝居がかった仕草で破片をひとつずつ両手に取ると、手首を滑らかに返した。

右手には何事もなかったように輝くレインボー・ローズが、左手には古びたストラップが現れる。

例のK・Kのイニシャルが入ったものだった。

「あ・・・」

「あなたが落としたんですよね。木村幸人さんの形見。」

ぎゅっと渡されたストラップを握りしめ、それを見つめる茉莉に向かって彼は優雅に一礼した。

「私のマジック、お楽しみいただけました？」

彼の口元には笑みが浮かんでいた。いつもの不敵な笑みではなく、人を驚かせるのが楽しくて仕方がないといった無邪気な笑み。こちらまでつられて笑ってしまうような、そんな笑みだ。

「お兄さんに欠けていたのは、純粋にマジックを楽しむ心。罪を犯しているという意識のある彼には楽しむ余裕はなかったのでしょうか・・・。どんなに素晴らしいテクニクを身につけていても、楽しむことが出来なくては人を楽しませることはできない・・・結局幸人さんは亡くなってしまいました。マジックを愛する者として言った檜野さんの言葉は間違っていない。」

怪盗は、はっきりと確かな意思を持って言い切った。

茉莉の口から微かに嗚咽が漏れる。小さなクリスタルの上で、透明な涙が弾ける。

後悔の涙を流す哀れな殺人鬼を、探偵と怪盗は見つめることしかできなかった。

階下のざわめきが、少しずつ近づいていた。

疑念

茉莉を引き取りに来た警察もいなくなった屋上。静寂を取り戻したこの場所に彼は佇んでいた。

そろそろと脇腹を抑えた彼の額には大粒の汗が浮かんでいたが、苦悶の色は見せなかった。

正直、手負いの体に今日の仕事はかなりこたえた。

階段を駆け上がれば息が上がり、ふとした動きで傷が激しく疼いた。そんな状態で体がいつも通り動かないことは良く分かっていたが、彼女を放ってはおけなかった。

気がつけば、動かない体に鞭打って走り出し、彼女に手を伸ばしていた。

体も心も重くて仕方がない。

じんわりと熱を帯びてきた体に吹き付ける風が彼をその場にへたり込ませそうにする。

さっさと帰ればいいものを、キッドがここにとどまるのには訳がある。

背後から小さな足音が近づいてきて、止まった。

額の汗を拭ってシルクハットを深くかぶり直す。もう少しだけ、怪盗を演じなければならぬ。

口角を上げて、笑みを作る。今の自分は怪盗キッド。大胆不敵にして常に余裕綽々。そう言い聞かせた。

「つたく、この命知らずが。」

ぶっきらぼうな少年の声が響く。

「目の前で人が死ぬところなんて、見たくなかったんでね。」
あえて軽い口調で言い放ってみる。

そうでもしなければ、胸の内を彼にとつとつと吐き出してしまいうだった。

気配は怪盗のまま、言葉使いを素に戻す。

彼には決して悟られてはならないのだ。

鋭く切り込んでくるかと思われた探偵の声のトーンが急に落ちた。心底分らないといった口調だった。

「どうして、工藤優作の名を騙ったんだ。」

彼に問われて答えに詰まる。

10年前の5月4日。有希子の電話で思い出したのだ。新一7歳の誕生日だ。その日ナイトバロンシリーズ初ベストセラーの記念パーティーが行われていた。工藤一家は全員出席していたのだ。

だから、優作があのだビルにいたはずはない。

そうと知りながら、優作は真実を明らかにしなかった。

それが、彼には探偵としても、息子としても理解できなかったのだ。なぜ、相容れないはずの探偵と怪盗が協力するような形になったのか。

まったく分からない訳ではない。現に今、怪盗と探偵は協力して事件を解決した。

今回に限らず、何回も。しかし、“なぜ”と問われても答えることはできない。

都合が良かったから、偶然奴がそこにいたから、使えるものは使う主義。

それらしき理由はたくさんあるが、どれも心の底から納得できるものではない。

敢えて言うなら、結果論でしかない。

答えは心の奥深くにある。きっと、永久にそれを誰かに教えることはないだろう。

「それを・・・突き止めるのが探偵だろう?」

怪盗は言葉を選んでそれだけ答えた。余計なことは言えないと思った。

「そうだな・・・。」

そう答えるものの、探偵はこのことは調べまいと心に決めていた。これは、父と怪盗の問題だ。

怪盗は星空を見上げていた。その表情は悲しんでいるようにも、懐かしんでいるようにも見える。

シルクハットとモノクルの影からのぞく表情を見た時、探偵の頭の中に何かが弾けた。

理屈では説明しきれない。論理的に“分かった”ではなく、感覚的に“感じた”のである。

探偵はゆっくりと息を吸い込んだ。

自分がこれから聞こうとしていることは、怪盗に対してとても失礼かもしれない。

しかし聞かずにはいられなかった。

「なあ・・・1つ聞いていいか。」

「ほーお、珍しいこともあるもんだな。」

後から考えれば、その時の怪盗の態度には無理があったように思う。探偵である自分の手前、必死の演技を続けていたのではないか。

彼の目を見て、怪盗は押し黙る。それほどの力が秘められた瞳だった。

「お前にはあるのか。」

「何が。」

分かっているはずなのに彼ははぐらかす。探偵の目を見れば、何を聞きたいのかは一目瞭然だった。

「マジックで犯行を重ねるお前に、“楽しむ心”はあるのか。」

彼がただの愉快犯ではないと確信しているからこそ出てきた問いだ

った。

本当は探偵にも分かっているのだ。この質問が無意味だと。その名の通り、魔法のような犯行を重ねる彼。探偵を警戒させるほどの実力と洞察力、呆れるほど気障な一面を持ちながら、どこか子供っぽくて憎めない彼。

その彼がマジックを愛しているかどうかなんて、それこそ子供でも分かる。

答えは分かりきっているのに聞かずにはいらなかった。

少しだけ、本当に少しだけ、怪盗が動揺したように見えた。

「・・・聞きたいか。」

「え？」

思いがけず、焦らすような言葉が怪盗から飛び出した。口調は暗くも明るくもなく、淡々としていたが投げやりにも聞こえる。感情を殺そうとして失敗したような感じだった。

俯いて、シルクハットの鍔をいつもより深く下げている彼の表情は読めなかった。

ただ、その姿は感じたことがないほど哀しげだった。

「いや、今は止めとく。聞いたところで、たぶん理解できねーからな。」

「オレは怪盗、お前は探偵。まあ、お互いを理解するってのは無理かもな。」

言葉を返しながら、彼は探偵の投げてきた変化球に少々心を乱されていた。

怪盗キッドにとって、マジックは武器。一步間違えば逮捕や命の危険すらあるゲームをクリアするためのアイテムだ。

確かに、自分はマジックが好きだ。しかし、キッドという仮の姿で純粋にそれを好きだと言えるのか。

先程、茉莉に語りかけながら感じた小さな心の傷は、探偵の言葉に

挟られた。

探偵も怪盗も、黙って相手の心に思いを馳せる。まだまだ街は眠らない。遠くに喧騒が聞こえた。

お互いに深い深い息をつく。

それが合図になったかのように、怪盗は気合いを入れ直してライブルに向き直った。

「それじゃな、また会おう、名探偵。次に会う時には・・・怪盗キッド様のショーを存分に楽しんでもらうぜ？月はいつでもオレの味方、夜はオレの時間だからな。」

挑戦的なセリフを残して煙幕と共に怪盗は消えた。あとに残されたのは、宝石と一枚のカード。

「・・・人遣い荒いんだよ・・・。」

ぼそっと呟いた探偵は不敵に笑っていた。

そう、笑っていた。

月明かりの中、事件は静かに幕を閉じたのだった。

答え

1週間後の江古田中央病院。

久しぶりに歩く明るい太陽の下で快斗は大きく伸びをした。

例の一件の後、何をしていたかはバレなかったものの、とにかく事実として一晩病院を抜け出した彼は様々な方面からたつぷりとお灸を据えられた。

なかでも青子の怒りは凄まじく、彼は半ば軟禁状態だった。

あの名探偵はあれから全く音沙汰ないが、彼は気にも留めていなかった。

星の数ほどの事件に関わっている彼のこと、今回のことが終われば自分など彼の記憶に残ることもないだろうと思っていた。

だから、背後から独特の高い声で呼びかけられた時は正直言って驚いた。

「快斗にーちゃんっ！退院おめでとう！」

「・・・お、おう、コナン・・・」

（なんでお前がここにいるんだよ！）

満面のお子様スマイルの裏に何があるのか、彼の本性を知っている分恐ろしく思う。

振り向きざまにあの化け物みたいなサッカーボールが一発、なんてことがなくて良かったと心の底から考えていた。

「んじゃ、オレは先にバス停行っちゃいな。」

蘭と立ち話を始めた青子にそう言って歩き出したが、数メートル歩いたところで呼び止められた。

「快斗にーちゃん。」

何となく無視できない響きを感じて立ち止まった快斗とコナンの間に一陣の風が吹く。

通りを行く車のエンジン音も、人の話し声も遠いざわめきに変わる。はつきり聞こえるのは、心臓の鼓動と相手の息遣いだけ。

ここで振り返れば、もう一人の自分の抑えが利かなくなりそうだった。快斗は背を向けたまま、少し俯いて次の言葉を待つ。

「やっぱり、聞きたい。」

強い光を宿し、自信と確信に満ち溢れた瞳が快斗を射抜いていた。

「お前の答え。」

不思議と躊躇いはしなかった。まずいという気持ちも、誤魔化す気も起きなかった。

彼がその気ならこちらも応えてやるのがライバルとしての礼儀だ。それにもう、迷わない。

軽く息を吐き出して顔を上げる。

コナンはあの独特の伶俐な気配を肌で感じていた。

殺気とは質の違う、むしろ心地よいスリルを感じさせる空気を纏った人物は目の前にいる。

どんな証拠よりも、言葉よりも、確かな答えがここにある。

「オレ（キッド）」にとっちゃ、単なる手段だが・・・」

息を詰めて、コナンは次の言葉を待つ。

心のどこかで望んでいる答えがあった。

「オレは心の底から愛してるんだよ。」

彼の心にあるのは、いつだって時計台の前の真っ赤なバラ。

（マジックが生み出す、奇跡という名の笑顔をな。）

彼らが満足げな笑みを浮かべたその時、突如乾いた音が辺りに響き渡る。

条件反射で咄嗟に身を固くしたコナンの上にはらはらと落ちてきたのはカラフルな紙吹雪。

目が点になった彼の前で青空に飛び立つのは十数羽の白い鳩。

そして振り返ったのは明るい悪戯っ子の笑みを浮かべた少年。

「じゃーなー！コナン！」

笑顔の高校生と呆れ顔の小学生の間には暖かい日差しが降り注いでいた。

永遠のライバル

「つたく……。ガキだな……。」

コナンは白い羽を一枚拾い上げて青い空にかざした。

一週間と数日前、もやもやした気持ちで同じように羽を受け止めたことが遠い昔のようだ。

本当は現場で突き止めたかった事実。月明かりの下で明らかになるはずだった仮面の裏側。

月下の推測は思いがけず明るい太陽の下で確信となった。

しかし、これで怪盗の真実にたどり着けたとは思わない。

あくまでも彼が織りなす奇術という名の魔法の中、たった一つの真実をこの手でつかみ取るまで彼は怪盗を追い続ける。

白い羽が風に流されて行く。いつも探偵や警察の手を優雅にすり抜けて行く怪盗のように、高い空へと昇っていくのを目で追った。

ふと思いついて携帯を開く。

“黒羽快斗”を電話帳で呼び出してそれをじっと見つめた。

（これで、いいんだよな。）

奴の正体を知ったからといって、彼らの勝負にケチはつかない。

けれど、けじめはつけておきたかった。

コナンの親指は迷うことなくボタンを操作し、最後にカーソルを“削除”に合わせる。

あっけなく、本当にあっけなくそれは消えた。

記憶はそれほど簡単に消去できない。

それでも、これが彼なりのけじめだった。

「コナン君。」

聞きなれた声がしたかと思うと、蘭の顔が視界に入ってきた。

彼女もまた、去っていく快斗と青子の後ろ姿を眺めながらコナンに語りかける。

「黒羽君と何話してたの？」

彼は少し迷ってから“コナン”として最高の笑顔を作る。

「男同士の話！」

彼女はしばらく不思議そうに彼を見つめていたが、やがて優しい笑みを浮かべる。

帰ろうか、と差し出された手を握り、彼が去っていったのとは反対の方向に足を踏み出した。

（次は負けねーよ、黒羽快斗。）

乗客の少ないバスに揺られ、快斗はいつもと変わらない街をぼんやりと眺めていた。

あんなつもりはなかった。

これまでも、この先も、自分から秘密を明らかにすることはないと思っていた。

白馬や紅子に対してやっているように、どこまでもしらばくれるつもりでいた。

しかし、あの瞳には勝てなかった。

言い方を変えれば乗せられた。

探偵の瞳で見つめられて、自分の中の怪盗が目覚めますのを止められなかったのだ。

それでも彼は後悔していなかった。

彼があくまでも月下で勝負を挑んでくるのなら、自分はそれを受けただけだ。

スリル満点の頭脳戦と追いかけて楽しむにしていなかった

ら嘘になる。

探偵と怪盗として対峙する瞬間に、どうしようもなく惹かれるものがあるのだ。

自分でも知らぬうちに口元が綻んでいた。

ふと思いついて開いた携帯には“彼”のアドレスがしっかりと残っている。

しばらくそれを見つめていたが、彼はそのまま携帯を閉じた。

“江戸川コナン”がこの世に存在する理由がなくなったら、その時に消去しよう。

そう考えて。

「快斗お？」

ふいに頭をつつかれる。はっと我に帰ると青子の顔があり得ない距離まで迫っていた。

「な、なんだよ。」

慌てて正常な距離まで顔を離し、目を逸らす。

（近いっつーの・・・。）

「コナン君と何話してたの？」

無邪気に聞く青子をちらっと見てから、快斗はまた窓の外に目を遣った。

当然、本当のことを言うつもりはない。しかし笑って誤魔化したり、安い嘘で済ませたりはしたくなかった。

「男同士の話だよ。」

「・・・快斗・・・？」

本当のことではないけれど、嘘でもない。

宿敵（？）白馬探とは少しだけ違う彼との関係は、快斗に色々なことを教えてくれる。

謎のままにするだけが、答えではない。

けれど、明らかにするだけが答えでも無い。

きつと、正解なんて存在しない。

ぽかーんと不思議そうにしている青子の頭を軽く小突いて振り返る。その表情は少し意地悪ないつもの悪戯っぽい笑み。

「お子様アホ子には分かんねーよ。」

「何よ。コナン君に分かるのに青子には分かんない話ってこと？」

「そーいうこと。」

やかましい二人組を乗せたバスは探偵とは反対の方向に彼ら連れれて行く。

（お前との勝負、楽しみにしてるぜ・・・工藤新一。）

探偵と怪盗は相容れないもの。同時に必要不可欠なもの。

前者は謎を解き、後者は謎を作る。

そのベクトルは正反対の方向を向いているようで、実は同じ。

信じられないような現実には、とんでもない夢物語に、狂わされた人生を取り戻すための長い戦いを繰り広げる二人。

出会いはいつも、偶然という名の必然。

探偵と怪盗、二人の勝負はまだまだ続くだろう。

今日もどこかで彼らはそれぞれの信念を貫く。それぞれの道はいつか交わるのかもしれない。

澄み渡った青空は未来へと続いているはずだ。

永遠のライバル（後書き）

とうとう完結です。

この作品を読んでくださったすべての方々、メッセージや感想を下さった方、
本当にありがとうございました！！

次の作品投稿がいつになるか分かりませんが、これからもよろしく
お願いします。

それでは、またいつかお会いしましょう！

広洲海人

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5563n/>

追憶の幻影～コナン&キッド～

2011年4月6日17時13分発行